

豊橋市埋蔵文化財調査報告書第51集

# 橋良遺跡(II)



1999年3月

豊橋市教育委員会  
豊橋遺跡調査会

豊橋市埋蔵文化財調査報告書第51集

は し      ら  
橋 良 遺 跡 (II)

1999年3月

---

豊橋市教育委員会  
豊橋遺跡調査会

## 例言

1. 本書は、豊橋市柱三番町14-1・2、13-3所在の愛知県共済生活協同組合豊橋事務所新築工事に伴い実施された埋蔵文化財発掘調査の報告書である。調査期間は平成10年8月17日～9月11日であり、今回は橋良遺跡の3次調査に相当する。
2. 調査は、愛知県共済生活協同組合が豊橋遺跡調査会に委託して行い、豊橋市教育委員会が調査の指導に当たり、岩瀬彰利（文化振興課文化財係）が担当した。
3. 発掘調査に際しては、事業者である愛知県共済生活協同組合より調査費用等の援助を受けた。発掘作業、整理作業については、地元の方々のご協力を得ることができた。報告書作成に当たり、遺物・遺構等の実測・拓本・トレース等については、井上佳子、鈴木泰子、平賀静子、山本絢子他の援助を受けた。また、写真撮影は岩瀬が行った。
4. 本書の執筆に際して、遺物について鈴木 徹（小坂井町役場）、原田 幹（愛知県教育委員会）、増山禎之（田原町役場）の各氏にご教示いただいた。記して感謝の意を表す次第である。
5. 調査区の設定は任意であるが、第1・2次調査と同じ座標を用いている。なお、この座標は建設省告示に定められた平面直角座標第Ⅶ系に準拠したものである。本書に使用した方位はこの座標に沿うものである。
6. 本書の執筆・編集は岩瀬彰利（豊橋市教育委員会）が行った。
7. 遺物・遺構のスケールについてはそれぞれに明示した。なお、写真の縮尺は任意である。
8. 本調査に当たって作成した写真・カラースライド・実測図等の記録、出土遺物は豊橋市教育委員会において保管している。

# 目次

第1章 遺跡の立地と歴史的環境 .....	1
第2章 調査の経過 .....	4
第3章 遺構	
1. 竪穴住居 .....	6
2. 掘立柱建物 .....	6
3. 方形周溝墓 .....	14
4. 溝 .....	15
5. 井戸 .....	16
6. 土壇 .....	16
第4章 遺物 .....	18
第5章 まとめ .....	37
報告書抄録 .....	38

## 挿 図 目 次

第1図	橋良遺跡位置図—明治32年— (1/20,000)	1
第2図	豊橋市内沿岸部弥生時代主要遺跡 (1/50,000)	3
第3図	調査区位置図 (1/2,500)	4
第4図	調査区全体図 (1/80)	5
第5図	遺構実測図—1 (1/60)	7
第6図	遺構実測図—2 (1/60)	8
第7図	遺構実測図—3 (1/60)	9
第8図	遺構実測図—4 (1/60)	10
第9図	SB-1・SK-4遺物出土状況図 (1/20)	11
第10図	SD-1内具層分布図 (1/60)	15
第11図	遺物実測図—1 (1/3)	24
第12図	遺物実測図—2 (1/3)	25
第13図	遺物実測図—3 (1/3)	26
第14図	遺物実測図—4 (1/3)	27
第15図	遺物実測図—5 (1/3)	28
第16図	遺物実測図—6 (1/3)	29
第17図	遺物実測図—7 (1/3)	30
第18図	遺物実測図—8 (1/3)	31
第19図	遺物実測図—9 (1/3)	32

## 表 目 次

第1表	遺物観察表	34
-----	-------	----

## 写 真 図 版 目 次

図版 1-1	調査区全景 (南から)	2	SB-1 全景 (南から)
2-1	SB-2~5 全景 (南東から)	2	SB-6~8 全景 (南から)
3-1	SB-9~11 全景 (南から)	2	SZ-1 北溝全景 (南から)
4-1	SZ-2 南溝・西溝全景 (南から)	2	SK-1 全景 (南から)
5-1	SE-1 (東から)	2	SB-5・P4 (東から)
3	SK-3 (北から)	4	SK-2 (南から)
5	SD-1 内具層分布状況 (西から)		
6-1	SB-1・SK-4内遺物出土状況 (南から)	2	SK-4内遺物出土状況 (北から)
7	出土遺物—1		
8	出土遺物—2		
9	出土遺物—3		
10	出土遺物—4		
11	出土遺物—5		
12	出土遺物—6		
13	出土遺物—7		

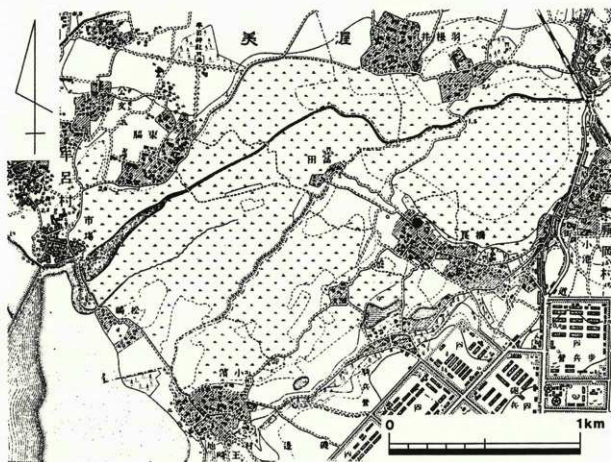
## 第1章 遺跡の立地と歴史的環境

### A. 遺跡の立地 (第1図)

橋良遺跡は豊橋市柱三番町を中心に所在する弥生時代の集落址である(第1図)。豊橋市は東が弓張山地、南が太平洋、西が三河湾にそれぞれ面し、平野部は限られている。市域北側は一級河川である豊川が三河湾に向かって西流し、市域の大半は豊川と現在浜松市を貫流する天竜川の前身、古天竜川によって造られた河岸段丘上に位置している。河岸段丘は高位面(天伯原面・標高30~60m)、中位面(高師原面・豊橋上位面・標高15~30m)、低位面(豊橋面・標高4~10m)の3面に大きく分けることができる。

橋良遺跡は柳生川左岸の低位段丘端部にあり、標高は約5m前後である。遺跡の立地については、前回の報告書で詳細に検討(註1)されているので詳しくは述べないが、遺跡のある段丘の縁部は、崖状の比較的急斜面で、現況で高低差2m程を測る。この段丘北西側には柳生川によって形成された沖積平野が広がっており、弥生時代には、前方に広がる湿地帯で水稻耕作を行っていたものと考えられる。そして、弥生時代以後に良好な居住域として現代まで継続していたのであろう。

註1 水野季彦 1994 「第1章1 遺跡の立地」『橋良遺跡』豊橋市教育委員会



第1図 橋良遺跡位置図—明治32年— (1/20,000)

## 第2章 調査の経過

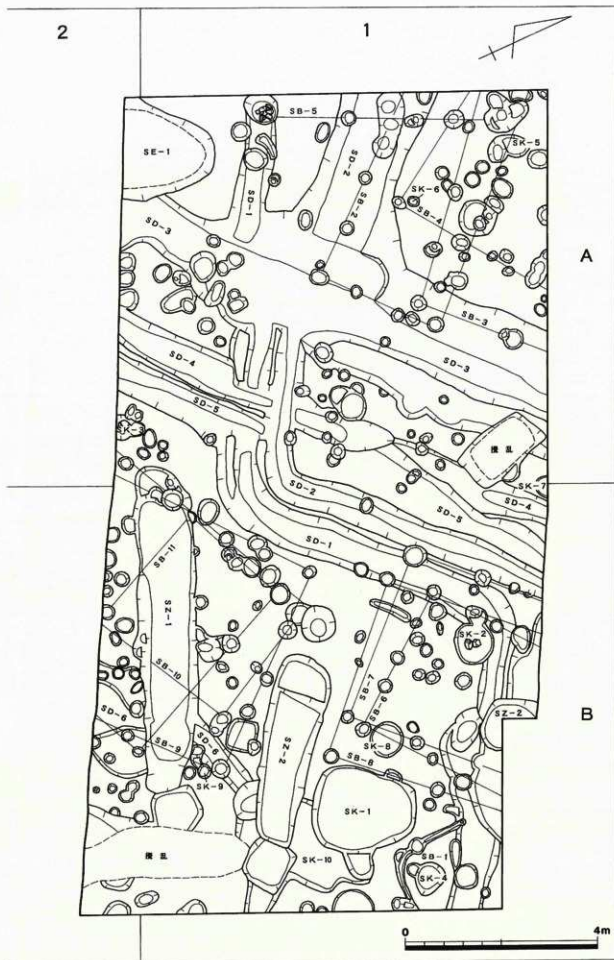
豊橋市柱三番町14-1他に所在する愛知県共済生活協同組合では、豊橋事務所の事務所棟を建て替えることになり、平成10年5月に教育委員会文化振興課に事前の相談があった。教育委員会では、現地が橋良遺跡の範囲に含まれる可能性が高いことから、愛知県教育委員会へ「埋蔵文化財所在の有無の有無及びその取扱いについて」の照会を指導した。そして、愛知県共済生活協同組合からの照会に基づき、市教育委員会では平成10年6月15日に試掘調査に着手し、愛知県教育委員会へ「試掘・確認調査の報告」及び「試掘・確認調査結果の報告」を行った。

試掘調査は、現状で建物のない駐車場部分にグリッド1箇所を設定（2㎡）し、調査を行った。調査の結果、地表下70cm付近の地点より貝層が確認され、弥生土器片や須恵器、中世陶器の遺物が出土した。この結果をふまえて市教育委員会と事業者である愛知県共済生活共同組合の2者で協議した。事務所の新築工事については、建物は鉄骨造3階建であり、基礎部分はかなりの面積で掘削を行う工事であった。そして、事務所建設は予定通り行うという事と建築工法の変更によって地下掘削を避けることはできない事を確認した。このため両者は、事務所建設部分の150㎡について発掘調査を行うことで合意した。発掘調査は愛知共済生活協同組合から委託を受けた豊橋遺跡調査会が行い、市教育委員会が調査の指導を行った。また、調査費用は事業者が全額負担することになった。

現地調査は平成10年8月17日～9月11日にかけて行った。調査区の位置は第3図の通りである。調査は調査区北に位置する県道を基準軸にして任意の基準点を設定し、10m×10mのグリッドを基本にして区割りし、表土等の遺物はグリッド単位で取り上げて行った。



第3図 調査区位置図 (1/2,500)



第4図 調査区全体図 (1/80)



## 第3章 遺構

今回の調査では竪穴住居、掘立柱建物、方形周溝墓、溝、土壇等の遺構が検出されている（第4図）。ここでは各遺構を種類毎に説明し、土壇に関しては遺物の出土したものを中心に記載する。記載に当たって竪穴住居・掘立柱建物はS B、方形周溝墓はS Z、溝はS D、土壇はS K、性格不明の土壇はS X、建物等の柱穴はS Pとそれぞれ表記する。なお、S B-1は竪穴住居、S B-2~4は掘立柱建物であり、規模等の数値は遺構検出面（地山面）で測った数値である。

調査区内の基本層序については、基本的に表土・耕作土（灰褐色砂質土）の下は地山（淡茶褐色砂質土）である。

### 1. 竪穴住居（第5・9図）

#### S B-1

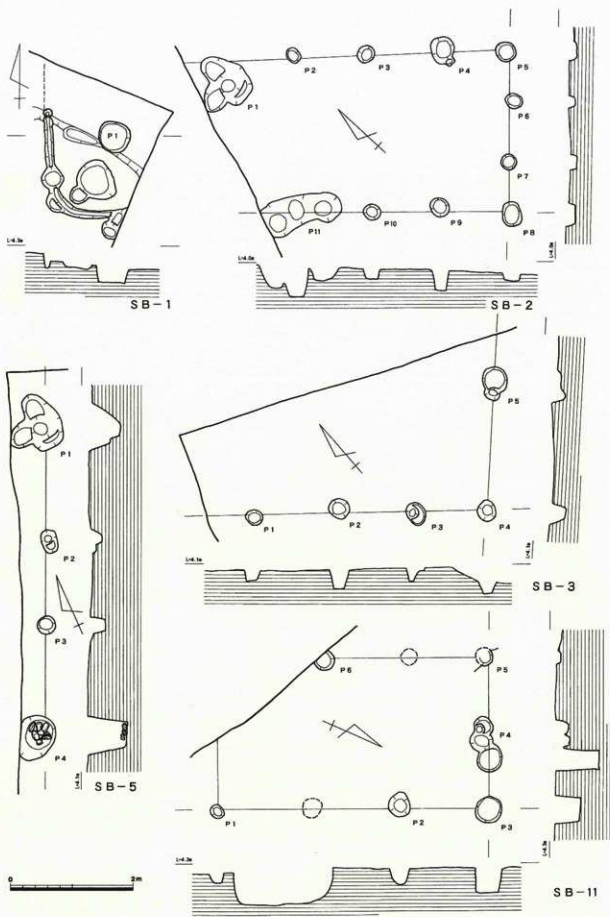
S B-1は竪穴住居であるが、南西角部分が検出されたのみで、北側部分はS D-1によって壊されている。住居址の平面形は隅丸方形若しくは隅丸長方形をなすものと推定される。住居址の壁際には幅14cm、床面からの深さが7~18cmの壁溝が巡らされており、床面は地山面から23cm（最大値）の深さで掘り込まれている。柱穴は4主柱穴のタイプと思われ、南西角付近で1箇所で確認されている。P 1はコーナー部より内側に1.2mの位置にあり、直径52cmの円形で床面からの深さは28cmを測る。住居内には南西角より約50cmの位置に長径72cm、短径58cm、深さ22cmの土壇（S K-4）が検出されているが、性格は不明である。遺物は住居床面から土師器（壺・高坏）が、S K-4から古墳時代前期（4世紀前半）の土師器（壺・高坏・台付甕）が出土しており（第9図）、住居の帰属時期は古墳時代前期と考えられる。

### 2. 掘立柱建物（第5~7図）

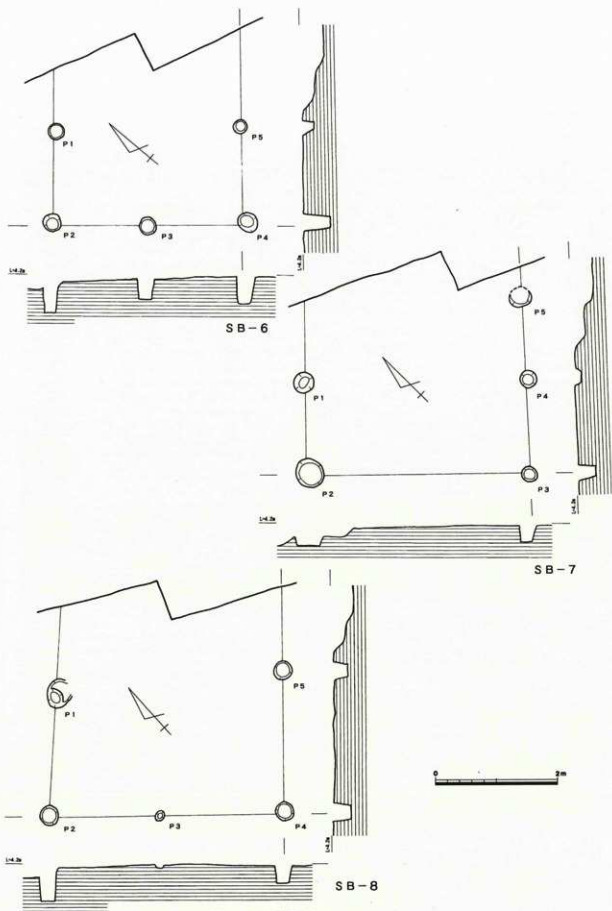
#### S B-2（第5図）

S B-2は3間×4間以上の掘立柱建物である。建物の主軸方位はN-42°-Wである。規模は現状で桁行5.2m、梁間2.7mを測る。桁行柱間の長さはP 1~P 2が1.3m、P 2~P 3が1.2m、P 3~P 4が1.3m、P 4~P 5は1.1m、P 8~P 9は1.2m、P 9~P 10は1.1m、P 10~P 11は1.2mである。梁間はP 5~P 6が0.8m、P 6~P 7が1.0m、P 7~P 8が0.8mを測る。

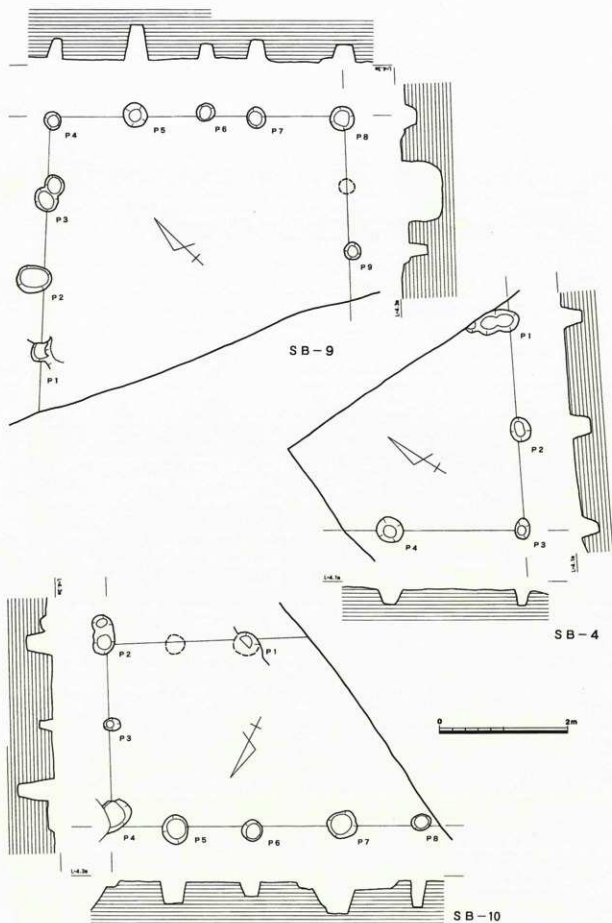
各柱穴の規模は、P 1は他土壇と重複するが最大径40cmの楕円形をなすものと思われ、深さは19cmを測る。P 2は最大径24cmの楕円形をなし、深さは11cmを測る。P 3は最大径23cmの楕円形をなし、深さは39cmを測る。P 4は最大径44cmの楕円形をなし、深さは18cmを測る。P 5は径32cmの円形をなし、深さは11cmを測る。P 6は最大径28cmの楕円形をなし、深さは11cmを測る。P 7は径25cmの円形



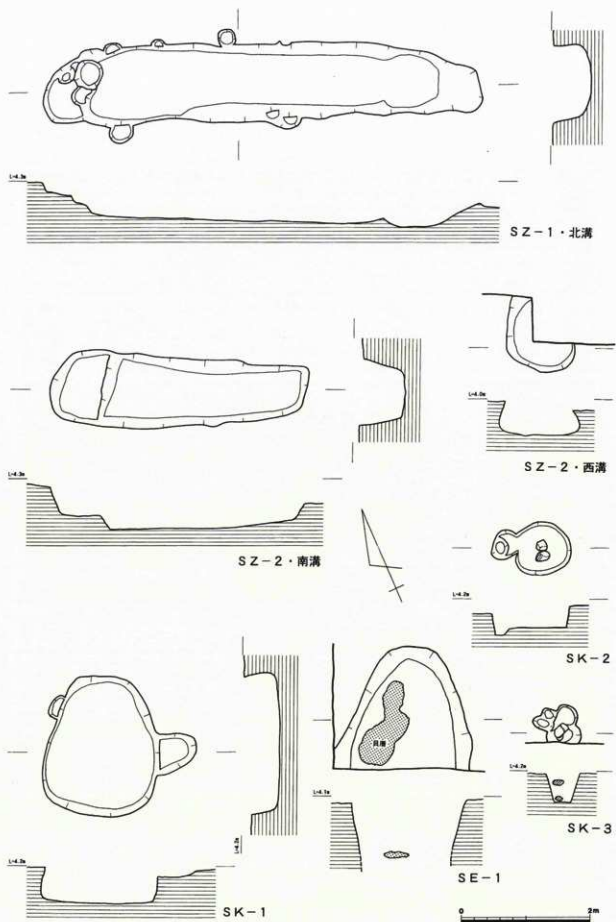
第5図 遺構実測図-1 (1/60)



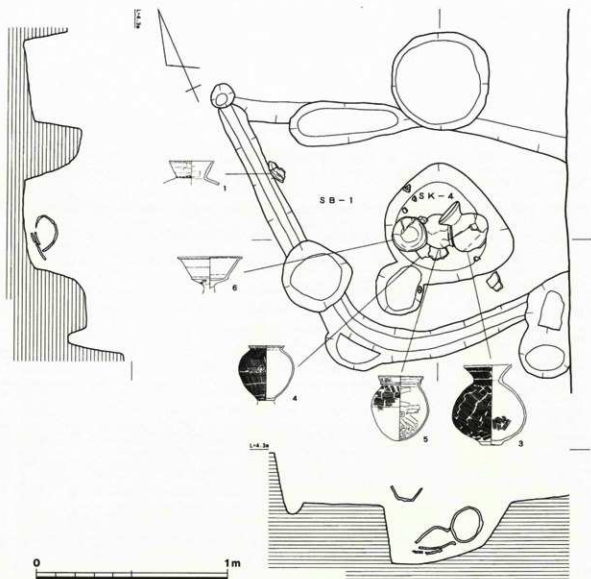
第6図 遺構実測図-2 (1/60)



第7図 遺構実測図-3 (1/60)



第8図 遺構実測図-4 (1/60)



第9図 SB-1・SK-4 遺物出土状況図 (1/20)

をなし、深さは9cmを測る。P8は最大径38cmの楕円形をなし、深さは12cmを測る。P9は径30cmの円形をなし、深さは11cmを測る。P10は径27cmの円形をなし、深さは14cmを測る。P11は両端を他土壌と重複するが、最大径50cmの楕円形をなすものと思われ、深さは48cmを測る。各柱穴から出土した遺物はP1から中世陶器片、P4から弥生土器片の細片が出ているのみであり、建物の時期は中世頃のものと思われる。

#### SB-3 (第5図)

SB-3は3間×1間以上の掘立柱建物である。建物の主軸方位はN-50°-Wである。規模は現状で桁行4.2m、梁間2.8m以上を測る。桁行柱間の長さはP1~P2が1.4m、P2~P3が1.3m、P3~P4が1.1mを測る。梁間はP4~P5が2.1mを測る。

各柱穴の規模は、P1は最大径28cmの楕円形をなし、深さは11cmを測る。P2は径34cmの円形をなし、深さは38cmを測る。P3は最大径38cmの楕円形をなし、深さは21cmを測る。P4は径30cmの円形をなし、深さは22cmを測る。P5は一部を他土壌によって壊されているが径38cmの円形をなし、深さ

8cmを測る。各柱穴から出土した遺物はP1から須恵器、土師器（鍋）、P2から土師器、P4からは土師器（皿）があり、建物の時期は16世紀以降のものと思われる。

#### SB-4（第7図）

SB-4は2間×1間以上の掘立柱建物である。建物の主軸方位はN-36°-Wである。規模は現状で桁行3.6m、梁間2.8mを測る。桁行柱間の長さはP1～P2が1.8m、P2～P3が1.6mである。梁間はP3～P4が2.1mである。

各柱穴の規模は、P1は他土壌と重複するが最大径34cmの楕円形をなし、深さは31cmを測る。P2は最大径40cmの楕円形をなし、深さは28cmを測る。P3は最大径32cmの楕円形をなし、深さは23cmを測る。P4は径38cmの円形をなし、深さは20cmを測る。各柱穴から出土した遺物はP2から土師器（皿）があり、建物の時期は中～近世と思われる。

#### SB-5（第5図）

SB-5は3間×1間以上の掘立柱建物である。建物の主軸方位はN-24°-Eである。規模は現状で桁行5.1mを測る。桁行柱間の長さはP1～P2が1.8m、P2～P3が1.3m、P3～P4が1.8mである。

各柱穴の規模は、P1は他土壌と重複しているが径64cmの円形をなし、深さは52cmを測る。P2は最大径40cmの楕円形をなし、深さは18cmを測る。P3は径28cmの円形をなし、深さは21cmを測る。P4は最大径76cmの楕円形をなし、深さは60cmを測る。底面に根石として10～20cm大の礫が敷き詰められている。各柱穴から出土した遺物はP1から須恵器、土師器、P4から弥生土器片があり、建物の時期は中世以降と思われる。

#### SB-6（第6図）

SB-6は1間以上×2間の掘立柱建物である。建物の主軸方位はN-48°-Eである。規模は現状で桁行3.2m以上、梁間3.1mを測る。桁行柱間の長さはP1～P2が1.5m、P4～P5が1.6mである。梁間はP2～P3が1.5m、P3～P4が1.6mを測る。

各柱穴の規模は、P1は径26cmの円形をなし、深さは20cmを測る。P2は径28cmの円形をなし、深さは39cmを測る。P3は径25cmの円形をなし、深さは33cmを測る。P4は最大径34cmの楕円形をなし、深さは42cmを測る。P5は最大径22cmの楕円形をなし、深さは18cmを測る。各柱穴から出土した遺物はP1から陶器（甕）、P3から須恵器があり、建物の時期は近世と思われる。

#### SB-7（第6図）

SB-7は2間以上×1間の掘立柱建物である。建物の主軸方位はN-45°-Eである。規模は現状で桁行3.5m以上、梁間3.6mを測る。桁行柱間の長さはP1～P2が1.5m、P3～P4が1.6m、P4～P5が1.4mである。梁間はP2～P3が3.6mを測る。

各柱穴の規模は、P1は径34cmの円形をなし、深さは28cmを測る。P2は径44cmの円形をなし、深

さは18cmを測る。P 3は径24cmの円形をなし、深さは29cmを測る。P 4は径30cmの円形をなし、深さは10cmを測る。P 5は土壌で壊されているが径32cmの円形をなすものと思われ、深さは9cmを測る。各柱穴から遺物は出土しておらず、建物の時期は不明である。

#### SB-8 (第6図)

SB-8は2間×1間以上の掘立柱建物である。建物の主軸方位はN-42° - Eである。規模は現状で桁行3.7m以上、梁間3.9mを測る。桁行柱間の長さはP 1～P 2が2.0m、P 4～P 5が2.4mである。梁間はP 2～P 3が1.8m、P 3～P 4が2.0mである。

各柱穴の規模は、P 1は最大径50cmの楕円形をなし、深さは33cmを測る。P 2は径30cmの円形をなし、深さは54cmを測る。P 3は最大径18cmの楕円形をなし、深さは6cmを測る。P 4は径30cmの円形をなし、深さは27cmを測る。P 5は径30cmの円形をなし、深さは23cmを測る。各柱穴から出土した遺物はなく、建物の時期は不明である。

#### SB-9 (第7図)

SB-9は3間以上×4間の掘立柱建物である。建物の主軸方位はN-42° - Eである。規模は現状で桁行4.6m以上、梁間4.6mを測る。桁行柱間の長さはP 1～P 2が1.2m、P 2～P 3が1.2m、P 3～P 4が1.2m、P 8～P 9が2.1mである。梁間はP 4～P 5が1.3m、P 5～P 6が1.1m、P 6～P 7が0.8m、P 7～P 8が1.3mを測る。

各柱穴の規模は、P 1は径26cm以上、深さは11cmを測る。P 2は最大径56cmの楕円形をなし、深さは23cmを測る。P 3は最大径40cmの楕円形をなし、深さは27cmを測る。P 4は最大径27cmの楕円形をなし、深さは30cmを測る。P 5は径36cmの円形をなし、深さは56cmを測る。P 6は径27cmの円形をなし、深さは23cmを測る。P 7は径30cmの円形をなし、深さは27cmを測る。P 8は径36cmの円形をなし、深さは25cmを測る。P 9は径26cmの円形をなし、深さは28cmを測る。各柱穴から出土した遺物はP 2から土師器、P 5から陶器(碗)、土師器(鍋)、P 8から土師器(皿・甕)があり、建物の時期は17～18世紀と思われる。

#### SB-10 (第7図)

SB-10は4間以上×2間の掘立柱建物である。建物の主軸方位はN-63° - Eである。規模は現状で桁行5.1m、梁間2.8mを測る。桁行柱間の長さはP 1～P 2が2.2m、P 4～P 5は0.9m、P 5～P 6は1.2m、P 6～P 7は1.4m、P 7～P 8は1.2mである。梁間はP 2～P 3が1.2m、P 3～P 4が1.6mを測る。

各柱穴の規模は、P 1は方形周溝墓に掘り込んだ径20cm以上で、深さは42cmを測る。P 2は他土壌と重複するが最大径32cmの楕円形をなすものと思われ、深さは39cmを測る。P 3は最大径25cmの楕円形をなし、深さは19cmを測る。P 4は最大径46cmの楕円形をなし、深さは7cmを測る。P 5は最大径48cmの楕円形をなし、深さは34cmを測る。P 6は最大径34cmの円形をなし、深さは23cmを測る。P 7は径44cmの円形をなし、深さは50cmを測る。P 8は最大径30cmの楕円形をなし、深さは41cmを測る。



各柱穴から出土した遺物はP2から弥生土器、P6から弥生土器が出ているが混入した可能性が高く、建物の時期は不明である。

#### S B-11 (第5図)

S B-11は3間×2間の掘立柱建物である。建物の主軸方位はN-23° -Wである。規模は現状で桁行4.4m、梁間2.5mを測る。桁行柱間の長さはP1～P2が3.0m、P2～P3は1.4m、P5～P6は2.7mである。梁間はP3～P4が1.3m、P3～P4が1.2mを測る。

各柱穴の規模は、P1は最大径24cmの楕円形で、深さは15cmを測る。P2は他土壌と重複するが最大径42cmの楕円形で、深さは24cmを測る。P3は径43cmの円形をなし、深さは38cmを測る。P4は他土壌と重複するが径34cmの楕円形をなし、深さは25cmを測る。P5は方形周溝墓に掘り込まれた径24cm程の土壌で、深さは7cmを測る。P6は径24cmの円形と思われる、深さは25cmを測る。各柱穴から出土した遺物はP3から弥生土器、土師器(鍋)、P4からは土師器(鍋?)が出土しており、建物の時期は16世紀以降のものと思われる。

### 3. 方形周溝墓 (第8図)

#### S Z-1 (第8図)

S Z-1は溝が一部のみ検出されているため全体形は明らかではない。しかし、1次調査のS Z-2の周溝と類似しているため、四隅が途切れるタイプの方形周溝墓と考えられる。今回検出された溝は、方形周溝墓の北溝で、溝の平面形はやや気持ち内湾気味の直線、断面形はU字形であるが部分的に壁面がオーバーハングしている。溝の規模は長さ6.9m、幅1.2m、深さ0.6mである。溝の埋土は黒褐色砂質土であり、多量の弥生土器が出土している。出土遺物より溝の帰属時期は弥生時代中期後葉の下長山式期のものと思われる。

#### S Z-2 (第8図)

S Z-2も2条の溝が一部のみ検出されているため全体形は明らかではない。溝の形態から四隅が途切れるタイプの方形周溝墓と考えたが、2条の溝の位置関係が第1次調査のS Z-1と異なるため違う性格の可能性も考えられる。検出された溝のうち南溝は、溝の平面形はやや内湾しており、断面形はU字形である。溝の規模は長さ4.0m、幅1.1m、深さ0.7mである。溝の埋土は黒褐色砂質土であり、多量の弥生土器が出土している。西溝は、溝の一部が検出されたのみで平面形は不明であるが、断面形はU字形で部分的に壁面がオーバーハングしている。溝の規模は長さ1.0m、幅1.3m、深さ0.5mである。南溝と西溝の間隔は3.1mである。両者の埋土は黒褐色砂質土であり、出土遺物より溝の帰属時期は弥生時代中期後葉の下長山式期のものと思われる。

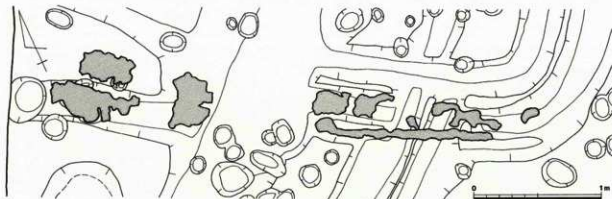
#### 4. 溝 (第4図)

##### SD-1 (第4・10図)

SD-1は調査区のA・B-1区を東西に蛇行して延び、規模は長さ20.4m、最大幅0.9m、深さ18cmである。溝の断面形はU字形で、埋土は暗灰褐色砂質土であった。溝の切り合い関係は、SD-3に壊され、SD-4・5を壊している。

溝内からは貝層がA-1区を中心に確認されている。この貝層は溝の埋土中にブロック状に混入しており、長さは0.3~2.4mのものが9箇所確認されている。この貝層の貝種組成は、ハマグリを主体にアカニシ、サルボウ、ツメタガイ、アサリ等であったが、詳細な分析は後日報告する予定である。

遺物は中世陶器(碗・甕)、陶器(碗)、丸瓦等が出土している。出土遺物とSD-3~5との切り合いから考えて、溝の帰属時期は18~19世紀と思われる。



第10図 SD-1内貝層分布図(1/60)

##### SD-2 (第4図)

SD-2はA-1区で東西に延び、B-1区で北東方向に曲がっており、SD-1に沿っている。規模は長さ14.5m、最大幅1.6m、深さ17cmである。溝の断面形はU形で、埋土は暗灰褐色砂質土であった。溝の切り合い関係は、SD-3に壊され、SD-4・5を壊している。

遺物は中世陶器(碗・甕)、陶器(碗・播鉢)、土師器(鍋)が出土している。出土遺物とSD-3~5との切り合いから考えて、溝の帰属時期は19世紀前葉と思われる。

##### SD-3 (第4図)

SD-3は調査区のA-1・2区を北東-南西方向にまっすぐ延び、規模は長さ9.7m、最大幅1.6m、深さ9cmである。溝の断面形は皿形で、埋土は暗灰褐色砂質土であった。溝の切り合い関係は、SD-1・2を壊している。

遺物は中世陶器(碗)、陶器(皿)、土師器(皿・鍋)が出土している。出土遺物とSD-1・2との切り合いから考えて、溝の帰属時期は19世紀中葉と思われる。

## SD-4 (第4図)

SD-4は調査区のA・B-1・2区を北東-南西方向にまっすぐ延び、規模は長さ9.7m、最大幅0.8m、深さ22cmである。溝の断面形はU字形で、埋土は暗灰褐色砂質土であった。溝の切り合い関係は、SD-1・2に横されている。

遺物はSD-5と分割できなかったが、中世陶器(碗・甕)、陶器(皿)が出土している。出土遺物とSD-1・2との切り合いから考えて、溝の帰属時期は17世紀前半頃と思われる。

## SD-5 (第4図)

SD-5は調査区のA・B-1・2区を北東-南西方向にまっすぐSD-4に沿って延び、規模は長さ9.8m、最大幅0.7m、深さ22cmである。溝の断面形はU字形で、埋土は暗灰褐色砂質土であった。溝の切り合い関係は、SD-1・2に横されている。

遺物は中世陶器(碗・甕)、陶器(小皿・蓋)、土師器(皿)が出土している。出土遺物とSD-1・2との切り合いから考えて、溝の帰属時期は17世紀前半頃と思われる。

## SD-6 (第4図)

SD-6は調査区のB-1・2区を弧状に巡り、規模は長さ6.3m、最大幅1.0m、深さ8cmである。溝の断面形は皿形で、埋土は暗灰褐色砂質土であった。溝は土壌等で横されている。

遺物は土製土脚等が出土している。出土遺物から考えて、溝の帰属時期は中～近世と思われる。

## 5. 井戸 (第8図)

## SE-1 (第8図)

SE-1は南側を調査区外に欠き、完掘はしていないが、規模、深さから井戸と考えた。平面形は楕円形と思われる、規模は長径1.9m以上、短径2.0m、深さ0.8m以上を測る。壁面は、ほぼ垂直に落ちており、埋土は暗灰褐色砂質土である。井戸内の深さ0.7mの位置より、長さ132cm、幅48cmの範囲で貝層が確認されている。貝層は、ハマグリを主体にアサリ、サルボウ、アカニシ等が見つかっている。貝種組成については後日報告する予定である。出土遺物には中世陶器(碗)、陶器(碗)、土師器(皿・鍋)があり、出土遺物より井戸の廃絶時期は17世紀前半頃と思われる。

## 6. 土壇 (第4・8図)

## SK-1 (第8図)

平面形は卵形をなし、規模は長径2.1m、短径1.8m、深さは48cmを測る。土壇壁面はオーバーハンクしており、埋土は暗灰褐色砂質土である。性格は不明であるが、土壇内からは弥生時代中期後葉の

弥生土器が多量に出土しており、帰属時期は弥生時代中期後葉の下長山式期と思われる。

#### SK-2 (第8図)

平面形は円形で、規模は長径90cm、短径86cm、深さは12cmを測る。土壌西側は他土壌によって重なるが、切り合い関係はわからなかった。土壌中央付近に約20cm大の円礫が2個置かれており、柱穴の根石であるものと思われる。埋土は暗灰色砂質土である。土壌内からは遺物は出土しておらず、帰属時期は不明である。

#### SK-3 (第8図)

平面形は円形と思われるが南側を調査区外で欠き、北側は他土壌3基によって壊されている。規模は径52cm、深さは59cmを測る。土壌内北側付近に約10～18cm大の角礫が2個置かれており、柱穴の根石であるものと思われる。埋土は暗灰褐色砂質土である。土壌内からは中世陶器(甕)の底部が出土しており、出土遺物より土壌の帰属時期は中世と思われる。

#### SK-4 (第5・9図)

SB-1内の土壌であり、説明はそこで行っている。SB-1参照。

#### SK-5 (第4図)

長径52cm以上、短径46cmの楕円形をなし、深さは20cmを測る。土壌南側は他土壌によって破壊されている。土壌内より須恵器(坏身)が出土しており、帰属時期は古代のものと思われる。

#### SK-6 (第4図)

径24cmの円形をなし、深さは8cmを測る。土壌内より窪み石が出土しているが、帰属時期は不明である。

#### SK-7 (第4図)

長径44cmの円形をなすものと考えられ、深さは13cmを測る。北側は調査区外である。遺物は須恵器(甕)、中世陶器(碗)、土師器(皿)が出土しており、帰属時期は中世と思われる。

#### SK-8 (第4図)

径72cmの円形をなし、深さは21cmを測る。土壌内より土師器(皿)が出土しており、帰属時期は中～近世と思われる。

#### SK-9 (第4図)

長径28cmの楕円形をなし、深さは42cmを測る。土壌内より中世陶器(小皿)と土師器(皿)が出土しており、帰属時期は中世である。

#### SK-10 (第4図)

土壌等によって壊されており平面形は不明であるが、深さは10cmの浅く掘り窪められた土壌である。土壌内より中世陶器(小皿)が出ており、帰属時期は中世である。

## 第4章 遺物

出土した遺物は、コンテナ(34cm×54cm×20cm)20箱程と調査面積のわりには量が多く、大半は弥生土器であった。ここでは図示できる出土遺物を遺構毎に分け、堅穴住居址(SB)、方形周溝墓(SZ)、土壙(SK)、井戸(SE)、溝(SD)、表土の順番で説明する。

### SB-1 (第11図1・2)

1は広口壺であるが、体部以下を欠損している。口縁部は八字形に開き、口縁端部は丸く仕上げられている。調整は内外面ナデであるが、頸部にハケメが見られる。2は高坏である。口縁部と脚部を欠損している。坏部はやや下半が張った浅い碗形をなし、脚部は外反して大きく開くものと思われ、スカシ穴を有す。坏部と脚部の接続部に櫛描文が見られる。これらの土器は古墳時代前期の元屋敷式、赤塚編年の廻間Ⅲ式に併行するものと思われる。

### SB-1・SK-4 (第11図3～6)

3は広口壺である。口縁部は八字形に開き、口縁端部はややナデ曲げられている。体部はやや下半が強く膨らみ、底部は中央部がやや窪んでいる。調整は外面ハケメ、内面ナデとハケメである。4は台付甕、いわゆるS字甕C類であるが、台部を欠いている。口縁部は頸部から外反し、上半部は僅かに外反しながら直立する。体部は強く膨らんでいる。調整は外面ハケメ、内面ナデで、外面肩部にタテハケ後に施されたヨコハケが巡っている。5は山陰系の甕である。口縁部は複合口縁で、端部はややナデ曲げられる。口縁部下端はやや張り出し、頸部はくびれ体部は膨らむ。調整は外面ヨコ方向のハケメであるが、頸部はタテ方向のハケメである。内面は板ナデで、底部には指押さえ痕が認められる。6は畿内系の高坏の坏部である。坏部は外方に開き、端部付近で強く外反する。坏底部は屈曲し、屈曲部は段をなしやや張り出す。調整は内外面ナデである。これらの土器のうち、3・4はSB-1と同様、古墳時代前期の元屋敷式、赤塚編年の廻間Ⅲ式に併行するものであり、5・6は併行する他地域のものと思われる。

### SZ-1・北溝 (第12図7～第13図38)

7～23は壺である。7は広頸壺で、底部付近を欠損している。口縁部は外反し端部は丸く、体部は円錐形に広がる。頸部に櫛描の横線文を巡らし、体部には櫛描の波状文を縦位に施している。調整は外面は口縁部ナデ、体部ハケメで、内面は指押さえ、ナデで、頸部にシボリ痕が認められる。8は細頸壺で、口縁部、底部付近を欠損している。体部は円錐形に広がり、櫛描の波状文を縦位に施しており、その下に横位の櫛描波状文を施している。調整は外面ハケメで、内面は指押さえ、ナデである。9・10は広頸壺の体部破片である。体部は円錐形に広がる形態で、頸部に櫛描の横線文、体部には縦位の櫛描文を施している。調整は外面ハケメで、内面は指押さえ、ナデで、頸部にシボリ痕が認めら

れる。11は細頸壺で、円錐形に広がる体部破片である。調整は外面ハケメ、内面は指押さえ、ナデで、頸部にシボリ痕が認められる。12は細頸壺の頸部付近の破片で、摩擦が著しいが数条の櫛描横線文を巡らしている。調整は外面は不明、内面は指押さえ、ナデである。13は12の壺底部である。外周を有し、底面は削り窪まされている。調整は外面ナデ、内面板ナデである。14は広頸壺の体部破片である。体部は円錐形に広がり、櫛描の横線文を数条巡らし、一部横線間に櫛描の連弧文を施している。調整は外面はナデ、内面は指押さえ、板ナデで、頸部にシボリ痕が認められる。15は太頸壺の口縁部破片である。口縁部は外反し端部は丸く、頸部に櫛描の横線文を巡らしている。調整は外面は縦位のハケメであるが、端部付近は横位のハケメで、内面は板ナデである。16は細頸壺の口縁部破片である。口縁部は強く外反し端部付近でやや内湾する。口縁端部は丸い。摩擦が著しく調整は不明である。17は広口壺の口縁部破片と思われ、強く外反する口縁部の端部に貝による連続刺突、内面に竹管による連続刺突を巡らしている。調整は内面ミガキ、外面ナデである。18は小型壺の体部破片である。体部は円錐形に広がり、櫛描の横線文を巡らした下に、櫛による連続刺突文を綾杉状に横位に施している。調整は外面ナデ、内面は指押さえ、ハケメである。19は壺の体部破片である。櫛による短線列を巡らし、その下に竹管による刺突文で補填している。調整は内外面ともナデである。20は壺の体部破片である。ヘラ描の沈線で、横位の文様帯を構成させ、その中に斜線列を施している。調整は外面ナデ、内面ナデ、指押さえである。21は壺の体部破片であり、無頸壺の可能性も考えられる。外面に櫛描の横線文と波状文が施されている。調整は外面ナデであるが、内面は摩擦して不明である。22は壺の頸部破片である。ヘラ描の沈線で、横位の文様帯を構成させ、その中に斜線列を施している。調整は外面不明、内面ナデである。23は壺の頸部破片である。ヘラ描の沈線で格子文を施している。調整は内外面ナデである。

24～29は甕である。24は条痕文土器の系譜を引くものと思われる甕で、口縁部はやや外方へ広がり、端部付近で外方に屈曲する。口縁端部は丸い。外面には櫛による条痕文が、口縁部付近は斜位に、体部には横位に施されている。内面は、口縁部付近に櫛による条痕文が横位に、その下は板ナデ調整されている。25は甕で、口縁部は強く外反し、端部は面をもち下端に連続刻目が施されている。調整は内外面ナデである。26・27は口縁部がくの字に折れる単純口縁の台付甕と思われるものである。口縁端部には連続刻目が入れられている。調整は内外面ナデであるが、26の口縁部外面は横位のハケメが認められる。28・29も口縁部がくの字に折れる単純口縁の台付甕であるが、口縁端部には連続刻目は見られない。調整は、28は内外面板ナデであるが、29は摩擦して不明である。

30は鉢である。口縁部が強く外反するもので、台付鉢になるものと思われる。調整は摩擦のため不明である。

31・32は底部破片である。30は小径の平底で、やや外周を有している。調整は外面ハケメ、内面ナデである。甕の底部と思われる。32は平底で、調整は外面板ナデ、内面ナデである。

33～34は台付土器の台部破片である。33・34は脚部との接続部分で、円筒状の中実で外面はナデ(33)と板ナデ(34)調整がされている。台付甕のものと思われる。35は脚部が屈曲して強く開くもので、調整は外面ナデ、内面ナデ、指押さえである。台付鉢の台部と思われる。36・37は脚部がハの字形に開くもので、36の接続部は中実で厚い。調整は36は外面板ナデで内面ナデ、37は摩擦のため不

明である。36は台付鉢、37は台付甕と思われる。38は脚部がやや内湾するもので、調整は外面板ナデ、内面ナデ、指押さえである。

これらの土器は、弥生時代中期の下長山式に比定される。

#### SZ-2・南溝（第14図39～第15図69）

39～48は壺である。39は細頸壺の口縁部・頸部破片である。頸部は長く、口縁部は緩やかに外反する。端部は屈曲して受口状になる。口縁部には櫛描波状文、頸部に櫛描の横線文を巡らしている。調整は外面はハケメ、内面は板ナデで、頸部にシボリ痕が認められる。40は細頸壺の体部破片で、39と同一個体のもと思われる。体部は円錐形に広がり、櫛描の波状文を縦位に施しており、その下に横位の櫛描波状文を施している。調整は外面ハケメ、下半部は板ナデで、内面は指押さえ、ナデである。41～46は広頸壺の体部破片である。41は口縁部は外反し端部は丸く、体部は円錐形に広がる。頸部に櫛描の横線文を巡らし、体部には櫛描文を縦位に施している。調整は外面は口縁部ナデ、体部ハケメで、内面は板ナデで、指押さえ痕が認められる。42は口縁部は外反し、端部に面をもつもので、頸部は比較的長い。体部は球形に近く膨れている。底部は平丸底である。口唇面には櫛による連続刺突文を入れ、頸部には棒状工具による連続刺突文を入れている。体部上半には櫛描横線文が4箇所を巡らされている。調整は外面の頸部ハケメ、体部は板ナデ、指押さえであるが剥離が著しい。43～46は大口壺の口縁部破片である。43・44は口縁部が強く外反するもので、44は端部が肥厚されている。頸部には櫛描横線文が巡らされ、43には縦位の櫛描文も見られる。調整は内外面板ナデである。45・46は口縁部が外反するもので、調整は外面板ナデ、内面ナデ、指押さえ（45）、内面板ナデである。47は強く開く壺の口縁部破片で、端部は肥厚されナデ窪む。調整はナデである。48は壺の体部破片で、櫛描横線文とヘラによる斜格子文が見られる。

49～53は甕である。49～51は口縁部が強く外反し、口縁端部は面をもち、連続刻目が入れられている。外面調整は、49・50は口縁部付近は板ナデ、体部には縦位のミガキ、51はナデ、指押さえである。内面は板ナデであるが、50のみ口縁部にハケメが見られる。52は小型の甕で、口縁部は強く外反し、口縁端部は丸い。調整は、外面は板ナデ、指押さえ、内面は口縁部ハケメ、体部は板ナデである。53は、口縁部がくの字に折れる単純口縁の台付甕と思われるものである。口縁端部には連続刻目が入れられている。調整は外面ナデ、内面板ナデと指押さえである。

54～64は底部破片である。54・55はやや小径の平底で、調整は外面ナデ、内面板ナデである。56はやや小径の平底で、底から比較的急に立ち上がる。調整は内外面ナデである。57・58は小径の平底で、やや外周を有している。調整は内外面板ナデである。59は小径平底で、底は窪み底である。調整は外面板ナデ、指押さえ、内面ナデである。60は平底で、調整は外面板ナデ、内面ナデである。61はやや小径の平底で、外周を有している。調整は外面ナデ、指押さえ、内面ナデである。62はやや小径の丸底で、調整は外面ナデ、内面ナデ、指押さえである。63は底面はやや窪み、木葉痕が見られる。調整は外面ナデ、内面板ナデである。64は平底で木葉痕が見られる。調整は内外面ナデである。

65～69は台付土器の台部破片である。65は脚部が強く膨らむもの、調整は外面ナデ、内面板ナデである。台付甕の台部と思われる。66・67は接続部が中実で厚く、脚部が強く開くもので、調整は外面

ナデ、内面板ナデである。強く赤変しており台付甕のものと思われる。68は脚部がハ字形に開くもので、調整は外面ナデ、内面ナデ、指押さえである。強く赤変しており台付甕のものと思われる。69は脚部との接続部で、やや外反する円筒状をなし、中空で内外面はナデ調整がされている。台付鉢のものと思われる。

これらの土器は、弥生時代中期の下長山式に比定される。

#### SK-1 (第16図70～第17図107)

70～84は壺である。70・71は細頸壺で、口縁部は外傾し頸部で括れ、体部はハ字状に広がる。頸部には櫛描の横線文を巡らし、体部には縦位の櫛描文を施し、71には櫛描連弧文が入れられている。調整は外面ナデ、内面はナデ、指押さえで、頸部にシボリ痕が認められる。72・73は細頸壺の口縁部破片で、口縁は丸みを帯びて袋状を呈し、端部付近で内湾する。このうち72は頸部は括れ、そこに櫛描横線文を巡らしている。調整は内外面ナデである。74は細頸壺の頸部破片で、頸部に櫛描横線文が入れられている。調整は外面ナデ、内面指押さえである。75～77は太頸壺で、口縁部は外反し頸部で括れる。端部には連続刻目(75)や部分刻目(76)が入れられ、75の頸部には櫛描横線文が巡らされている。調整は内外面ナデであるが、75・76は端部付近にハケメが見られる。78は口縁部が強く外反し、頸部は円筒状をなしている。端部は面をなし、櫛による連続刻目を入れ、頸部には櫛描横線文が2箇所入れられている。調整は外面板ナデ、内面板ナデ、指押さえである。79・80は太頸壺の口縁部で、いわゆる受口状をなしている。このうち、80は櫛描波状文が入れられている。調整は内外面ナデ、指押さえ(79)と内外面板ナデ(80)である。81は太頸壺の口縁部で、口唇部は肥厚され面をもち、そこに櫛による連続刻目を施している。調整は外面ハケメ、内面ナデである。82～85は壺の体部破片で、櫛描横線文(82)、櫛描横線文と波状文(83)、ヘラによる斜格子文(84・85)が施されている。

86は高坏である。口縁部と底部を欠損している。坏部は平坦な底面のみ残し、脚部は外反して大きく開くものと思われ、スカシ穴を有す。この高坏は古墳時代前期の元屋敷式、赤塚編年の廻間Ⅲ式に併行するものと思われ、混入品の可能性が高い。

87～89は鉢若しくは台付鉢と思われるものである。87は口縁部が外傾し、端部付近で直立するもので、調整は内外面ハケメである。88は端部が外反する口縁部で、体部は膨らむ。調整は外面ハケメ、内面板ナデである。89は口縁部は内傾し、端部付近で外反する。体部は強く張り出し、底部にかけて急速に窄まる。口唇面には櫛描波状文が、口縁部には櫛による大小の波状文が入れられている。口縁内面にも櫛描波状文が見られる。調整は外面ナデ、内面はナデ、板ナデである。

90～92は甕である。90は口縁部が緩やかに外反する。調整は板ナデである。91・92は口縁部が強く外反し、口縁端部は面をもち、91は連続刻目が入れている。調整は、91は外面の口縁部付近はハケメ、体部は板ナデで、内面は板ナデである。92は外面ハケメ、内面は口縁部ハケメ、体部ナデである。

93～96は底部破片である。93・94はやや小径の平底で、調整は内外面ナデ、94は内面に指押さえが見られる。95は小径の平底で、やや外周を有している。調整は内外面ナデ、指押さえである。96は小径の平底で、外周を有している。調整は外面板ナデ、内面ナデである。93～95は壺底部、96は甕底部



と思われる。

97～107は台付土器の台部破片である。97～99は脚部との接続部で、やや外反する円筒状をなし、中実で外面調整は板ナデ（97・98）、ミガキ（99）がされている。100も接続部破片で、体部・脚部が広がるものである。調整は外面板ナデ、内面ナデ、板ナデである。101は脚部が強く張り出すもので、調整は外面ナデ、内面板ナデ、指押さえである。102は脚部が膨らみ、調整は外面ハケメ、内面板ナデ、指押さえである。103～107は脚部がハ字形に開くもので、調整は内外面ナデであるが、104・106は内面板ナデ、107は内外面に指押さえ痕が見られる。これら台部のうち、101は台付鉢の可能性が考えられるが、他は台付甕のものと思われる。

これらの土器は、弥生時代中期の下長山式に比定されるが、85は古墳時代前期の元屋敷式と思われ、竪穴住居と同時期のものが混入したものと思われる。

#### SK-3（第18図108）

108は中世陶器・甕の底部である。底径12cm程の平底で、器壁は底面から真っ直ぐ立ち上がる。器面はケズリ後ナデ調整で、自然釉が付着している。時期は中世である。

#### SK-5（第18図109）

109は須恵器・坏身の底部破片で貼り付け高台であるが、体部以上を欠損している。時期は8～9世紀のものと思われる。

#### SK-6（第18図110）

110は窪み石と思われるものである。元は方形の扁平な石であったと思われるが、3コーナーを欠損している。窪み部は径5.5cm、深さ1.5cmの楕円形である。時期不明。

#### SK-7（第18図111～113）

111は須恵器・甕の頸部破片である。112は中世陶器・碗の底部破片である。高台の断面形はU字形で端部は丸い。113は土師器・皿で、器高は比較的高く、内外面回転ナデである。111は古代、112は12世紀中葉、113は中～近世と思われる。

#### SK-8（第18図114）

114は土師器・皿である。手づくね整形で、器形は比較深い。内面はナデで、外面は未調整で底に指頭圧痕が認められる。中～近世のものである。

#### SK-9（第18図115～117）

115・116は中世陶器・小皿であり、断面三角形の高台を有している。115は口縁端部がやや外反している。117は土師器・皿である。手づくね整形で、器形は浅い。内面はナデで、外面は未調整で底に指頭圧痕が認められる。これらは12世紀頃のものと思われる。

## SK-10 (第18図118)

118は中世陶器・小皿で、無高台の底部は平坦で糸切り、口縁部は小さく外方に伸びる。13世紀のものである。

## SE-1 (第18図119~125)

119・120は中世陶器・碗の底部で、有高台のものである。高台の断面形は、119は箱形で初段痕が付いており、120は低三角形である。121は陶器・碗である。丸碗は削り出し高台で、高台の断面形は箱形である。灰軸が施軸されている。122は陶器・播鉢である。底部を欠損しているが、口縁部は屈曲し縁帯を有し、体部は直線的に開く。内面に放射状のクシ目が見られる。123・124は土師器・皿である。123は器形は浅く、内外面ナデで底に直径3mm程の穿孔が見られる。124は手づくね整形で、器形は比較的深い。内面は板ナデで、外面は未調整で底に指頭圧痕が認められる。125は土師器・鍋である。底部を欠損するが半球形と思われ、1対の内耳をもつ。出土遺物の時期は、119・120は13世紀前半、121・122は17世紀前半、123・124は中～近世、125は16～17世紀のものである。

## SD-1 (第18図126~130)

126は中世陶器・碗の底部で、有高台のものである。高台の断面形は、U字形である。127は中世陶器・甕の体部破片である。外面に押印文が見られる。128は陶器・碗である。扁平な丸碗で、削り出し高台の断面形は細く底面は丸い。灰軸が施軸され、内面に染め付けがされている。129は陶器・碗である。口縁部は外方へ広がるが端部を欠損する。高台は削り出し高台である。灰軸が施軸されている。130は瓦である。丸瓦と思われ、外面はナデ調整、内面は布目圧痕が見られる。126は12世紀後半、127は12～13世紀、128は18～19世紀、129は17世紀中葉、130は古代のものと思われる。

## SD-2 (第18図131~第19図141)

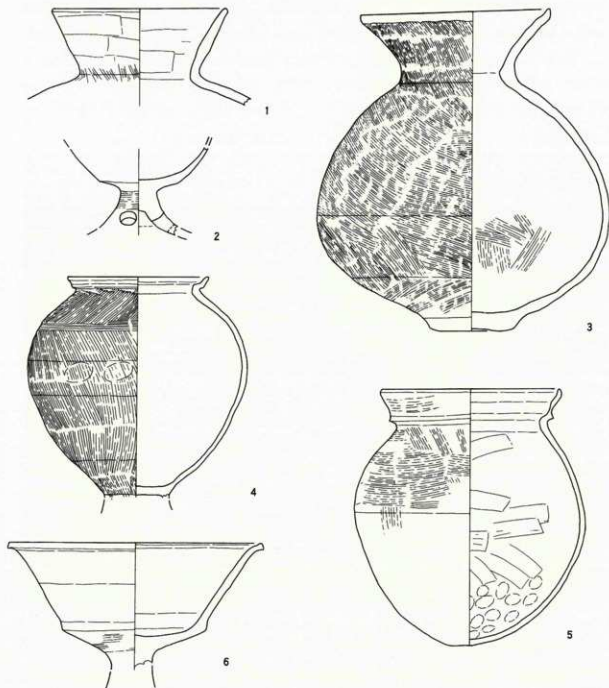
131・132は中世陶器・碗の底部で、有高台のものである。高台の断面形は、箱形である。133は陶器・碗である。丸碗は削り出し高台で、高台の断面形は箱形である。鉄軸が施軸されている。134は中世陶器・甕の口縁部破片である。常滑産のもので、口縁端部を折り返して縁帯を形成している。135は陶器・播鉢である。口縁端部は肥厚され、体部は底部より直線的に開く。内面に放射状のクシ目が見られる。136・137は土師器・鍋である。136は底部を欠損するが半球形と思われ、1対の内耳をもつ。137は口縁部が直立し、胴部が張る茶釜形の鍋である。131・132は12世紀後半、133は17世紀、134は15世紀後半～16世紀前半、135は19世紀前葉、136・137は16～18世紀代と思われる。

SD-1とSD-2は溝が一部重なっている部分があり、一括して遺物を取り上げている。138～141はその際に取り上げた遺物で、どちらに属するものが判別しないものである。138は中世陶器・碗の底部で、有高台のものである。高台は低く潰れている。139は中世陶器・甕の体部破片である。外面に押印文が見られる。140・141は中世陶器・甕の口縁部破片である。常滑産のもので、口縁端部を折り返して縁帯を形成している。138は13世紀前半、139は12～13世紀、140は16世紀前半、141は15世紀の

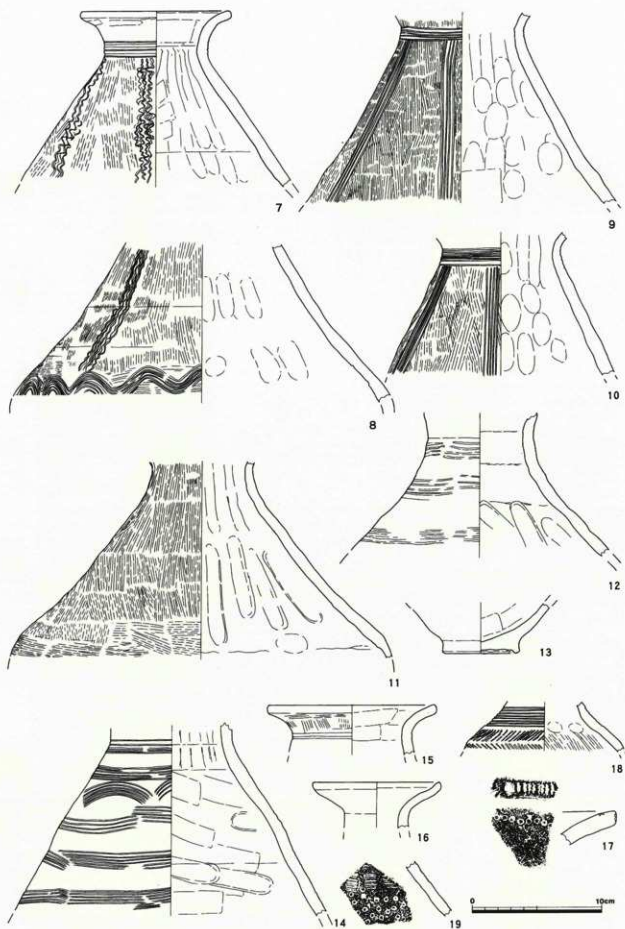
ものである。

SD-3 (第19図142~148)

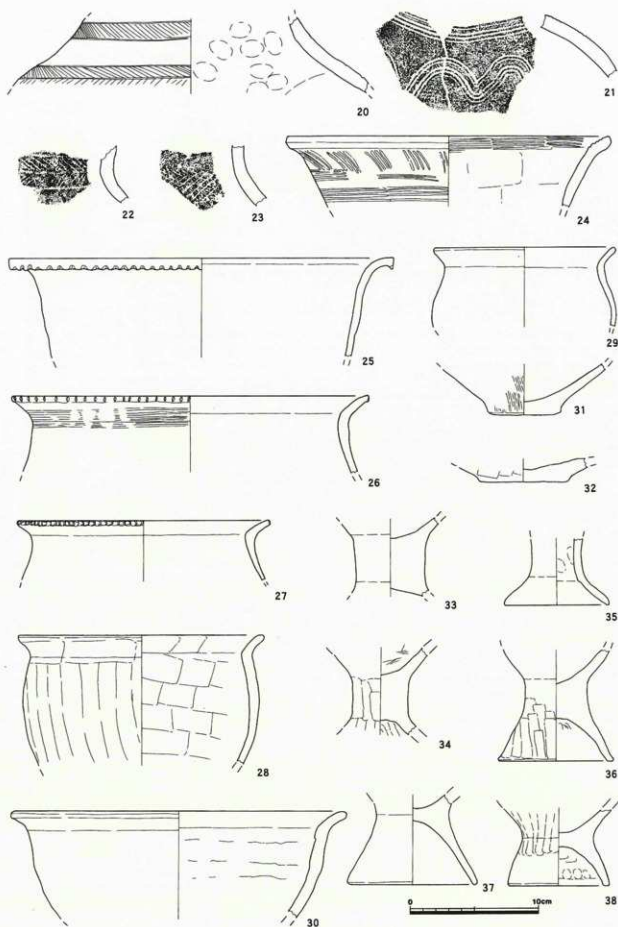
142は土師器・高坏の脚部破片である。筒部は直線的で、裾部が屈曲して大きく広がるものと思われる。143は中世陶器・碗の底部で、有高台のものである。高台の断面はU字形である。144は陶器・小皿である。器形は緩やかに広がり、口縁部でやや内湾する。底部は削り出しである。鉄釉が施釉されている。145~147は土師器・皿である。手づくね整形形で、器形は比較的浅い。内面は145は板ナデ、146・147ナデで、外面は未調整で底に指頭圧痕が認められる。148は土師器・鍋である。いわゆるくの



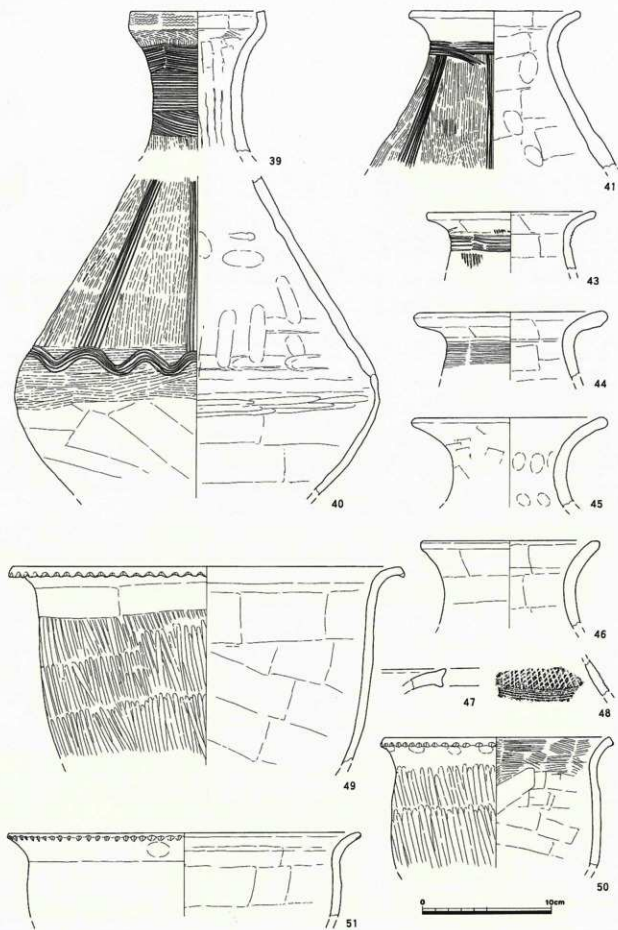
第11図 遺物実測図-1 (1/3)



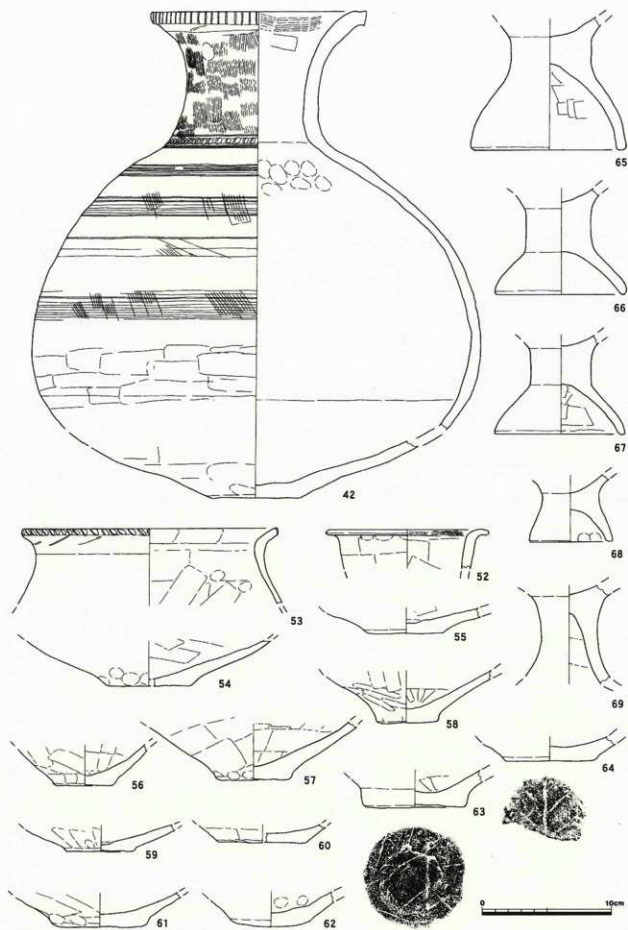
第12图 遺物実測図-2 (1/3)



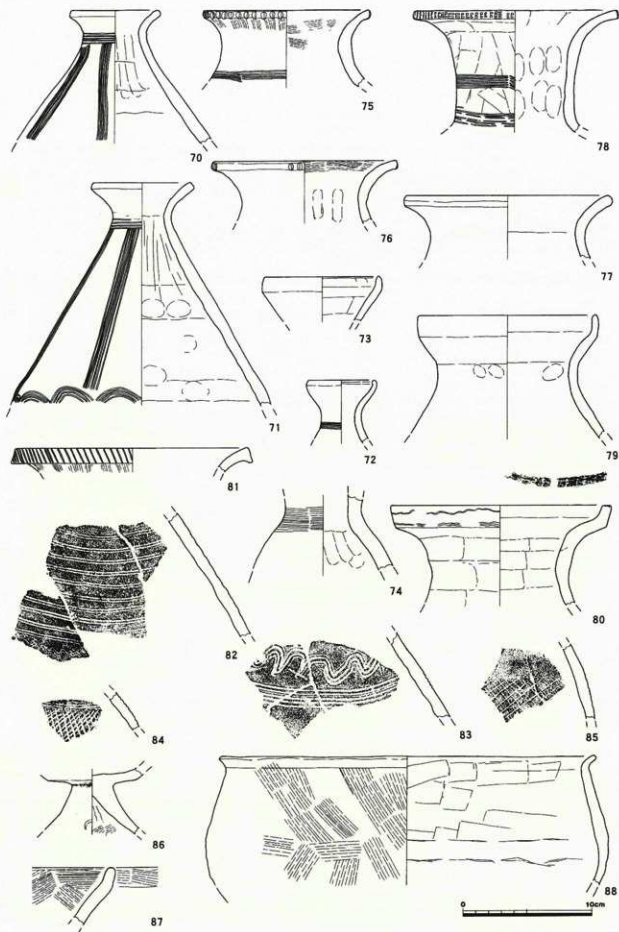
第13图 遺物実測図-3 (1/3)



第14图 遺物実測図-4 (1/3)

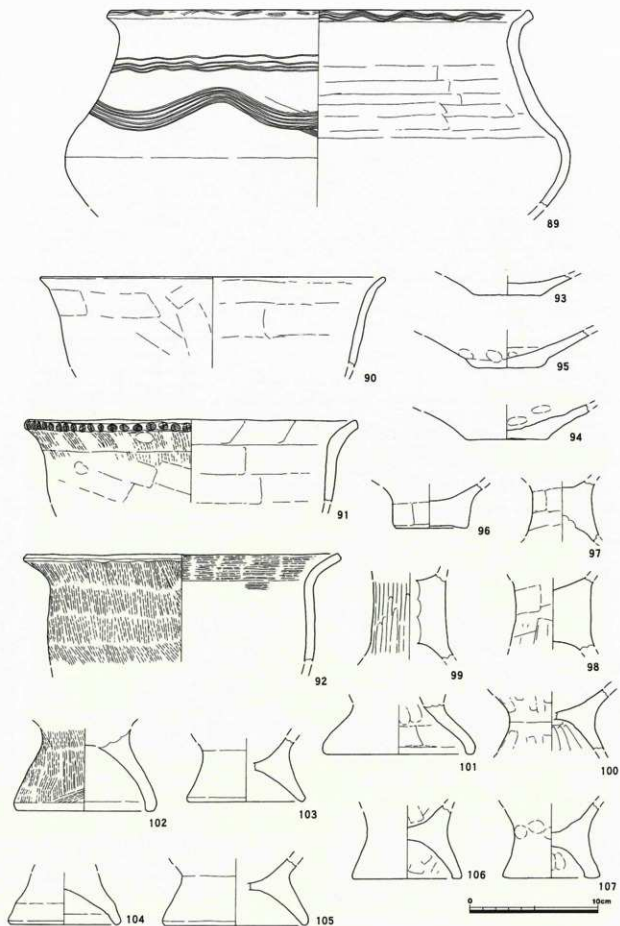


第15圖 遺物実測図-5 (1/3)

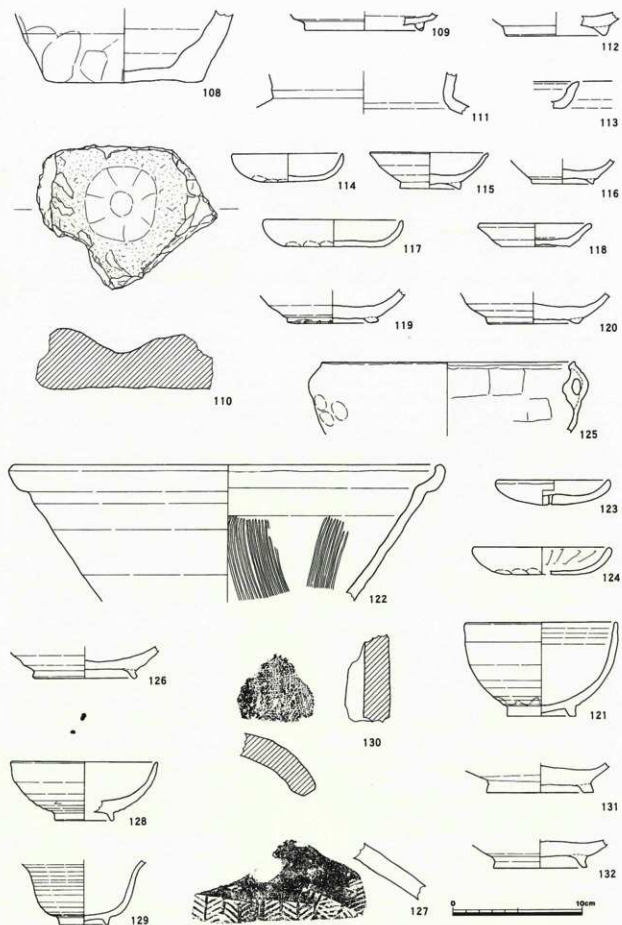


第16图 遺物実測図-6 (1/3)

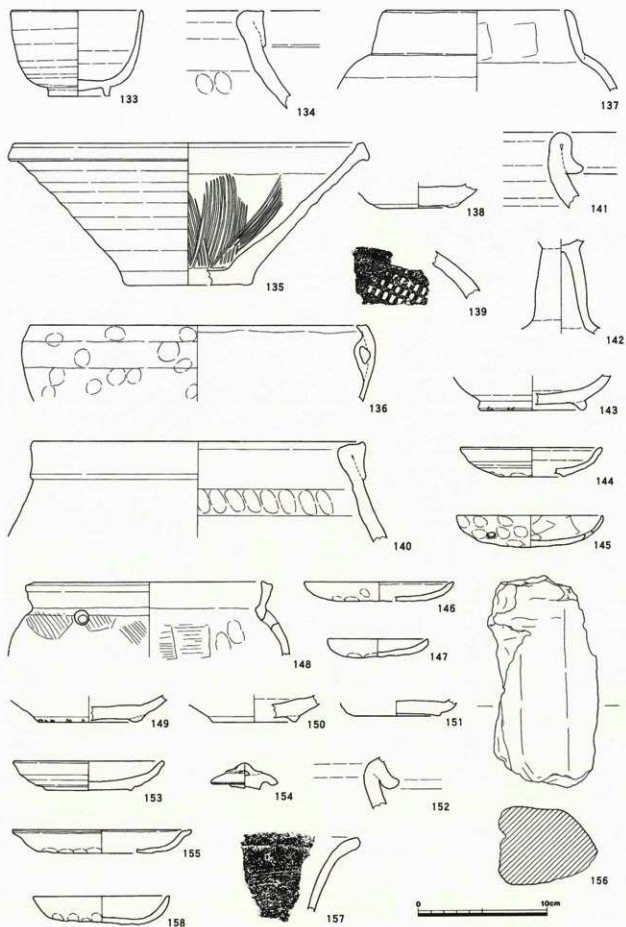




第17図 遺物実測図-7 (1/3)



第18图 遗物实测图-8 (1/3)



第19图 遺物実測図-9 (1/3)

字形鍋であり、口縁端部はナデ窪められ、体部にはハケメ調整が行われる。屈曲部付近に穿孔が認められる。142は古墳時代中期、143は12世紀後半、144は19世紀中葉、145～147は中～近世、148は16世紀と思われる。

#### SD-4・5 (第19図149～155)

SD-4とSD-5は重複しており、溝精査時に重複関係が把握できなかった。このため、出土遺物については両者を一括して取り上げている。149～151は中世陶器・碗である。149・150は有高台のもので、高台の断面は蒲鉾形である。149は高台に初登痕が付着している。151は底部が無高台で、糸切り痕が認められる。152は中世陶器・甕の口縁部破片である。常滑産のもので、口縁端部を欠くが口縁部に縁帯を形成している。153は陶器・小皿である。器形は緩やかに広がり、口縁部でやや内湾する。底部は若干削り出している。灰軸が施軸されている。154は陶器・蓋である。径5.2cmで、天蓋部に粘土紐貼り付けによる握みを有す。155は土師器・皿である。手づくね整形で、器形は比較的浅く口縁部がやや外反する。内面はナデで外面は未調整で底に指頭圧痕が認められる。149・150は13世紀前半、151は13世紀後半、152は15世紀、153は17世紀前半、154・155は近世である。

#### SD-6 (第19図156)

156は土製支脚である。両端部を欠損し、断面形は五角形をなしている。調整はナデで、上部が絞られている。時期は中世頃と思われる。

#### 表土 (第19図157・158)

157は条痕文土器・甕の口縁部破片である。外反する口縁部の端部は丸く、器面には条痕が見られる。158は土師器・皿である。器形は浅く、内面はナデで、外面は未調整で底に指頭圧痕が認められる。157は弥生時代中期前葉、158は近世である。

第1表 遺物観察表

遺物%	種・遺構 器種・分類	口径	器高	底径	残	胎土	焼成色	調	調整	備考
1	S B-1 H 壺	9.4	(7.5)		10	密	良好	茶褐色	内面板ナブ、外面板ナブ、ハケメ	
2	S B-1 H 高杯		(6.7)		50	密	良好	淡赤褐色	内面ナブ、外面ナブ、ハケメ	
3	S B-1 S K-4 H 壺	14.7	24.9	6.6	98	密	良好	淡赤褐色	内面ナブ、ハケメ、外蓋ハケメ	
4	S B-1 S K-4 H 壺	11.0	(17.1)		30	密	良好	淡灰褐色	内面ナブ、外面ハケメ、指押さえ	
5	S B-1 S K-4 H 壺	13.7	20.1		95	密	良好	淡赤褐色	内面ナブ、板ナブ、指押さえ、外面ハケメ	
6	S B-1 S K-4 H 高杯	19.8	(9.8)		50	密	良好	淡赤褐色	内面ナブ、外面板ナブ	
7	S Z-1 北溝 Y 壺	11.4	(13.7)		30	密	良好	暗灰褐色	内面板ナブ、外面ハケメ	外面縞線文
8	S Z-1 北溝 Y 壺		(12.2)		10	密	良好	暗褐色	内面ナブ、指押さえ、外面ハケメ	外面縞線文
9	S Z-1 北溝 Y 壺		(14.2)		10	密	良好	黒褐色	内面ナブ、指押さえ、外面ハケメ	外面縞線文
10	S Z-1 北溝 Y 壺		(11.1)		10	密	良好	黒褐色	内面ナブ、指押さえ、外面ハケメ	外面縞線文
11	S Z-1 北溝 Y 壺		(15.3)		40	密	良好	黒褐色	内面ナブ、指押さえ、外面ハケメ	
12	S Z-1 北溝 Y 壺		(11.2)		20	やや粗	良好	灰白褐色	内面ナブ、指押さえ、外面縞線	外面縞線文
13	S Z-1 北溝 Y 壺		(3.8)	6.0	5	やや粗	良好	灰白褐色	内面板ナブ、外面ナブ、底部クズリ	12と同一體
14	S Z-1 北溝 Y 壺		(15.0)		10	密	良好	暗灰褐色	内面板ナブ、外面ナブ	外面縞線文
15	S Z-1 北溝 Y 壺	12.8	(4.0)		5	密	良好	黒褐色	内面板ナブ、外面ハケメ	外面縞線文
16	S Z-1 北溝 Y 壺	9.8	(3.5)		5	密	良好	黒褐色	内外面縞線	
17	S Z-1 北溝 Y 壺				5	密	良好	褐色	内面ミガキ、外面ナブ	口唇・内面刺突文
18	S Z-1 北溝 Y 壺		(3.8)		5	密	良好	淡褐色	内面ナブ、ハケメ、指押さえ、外面ナブ	外面縞線文・刺突文
19	S Z-1 北溝 Y 壺				5	密	良好	黒褐色	内外面ナブ	外面縞線文・刺突文
20	S Z-1 北溝 Y 壺		(5.9)		5	密	良好	淡褐色	内面ナブ、指押さえ、外面ナブ	外面縞線文
21	S Z-1 北溝 Y 壺				5	密	良好	黒褐色	内面縞線、外面ナブ	外面縞線文
22	S Z-1 北溝 Y 壺				5	密	良好	茶褐色	内外面ナブ	外面縞線文
23	S Z-1 北溝 Y 壺				5	密	良好	茶褐色	内外面ナブ、	外面縞線文
24	S Z-1 北溝 Y 壺	25.0	(5.5)		5	密	良好	淡茶褐色	内面板ナブ、条痕、外面条痕	
25	S Z-1 北溝 Y 台付壺	30.0	(7.7)		20	密	良好	褐色	内外面ナブ	口唇刻目
26	S Z-1 北溝 Y 台付壺	27.7	(5.9)		5	密	良好	淡褐色	内面ナブ、外面ナブ、ハケメ	口唇刻目
27	S Z-1 北溝 Y 台付壺	19.8	(4.7)		5	密	良好	暗褐色	内外面ナブ	口唇刻目
28	S Z-1 北溝 Y 台付壺	19.1	(10.1)		20	密	良好	淡茶褐色	内外面板ナブ	
29	S Z-1 北溝 Y 台付壺	13.8	(6.2)		5	やや粗	良	淡赤褐色	内外面縞線	
30	S Z-1 北溝 Y 台付鉢	25.6	(8.4)		5	やや粗	良	淡茶褐色	内外面縞線	
31	S Z-1 北溝 Y 底部		(4.0)	5.6	5	密	良好	淡褐色	内面ナブ、外面ハケメ、底面未調整	
32	S Z-1 北溝 Y 底部		(1.8)	6.8	5	密	良好	淡灰褐色	内面ナブ、外面板ナブ、底面未調整	
33	S Z-1 北溝 Y 台部		(6.1)		5	密	良好	淡褐色	内外面ナブ	
34	S Z-1 北溝 Y 台部		(6.8)		5	密	良好	淡赤褐色	内面ナブ、外面板ナブ	
35	S Z-1 北溝 Y 台部		(5.2)	7.9	5	密	良好	褐色	内面ナブ、指押さえ、外面ナブ	
36	S Z-1 北溝 Y 台部		(8.7)	9.0	5	密	良好	淡赤褐色	内面ナブ、外面板ナブ	
37	S Z-1 北溝 Y 台部		(7.1)	10.1	5	密	良好	淡赤灰色	内外面縞線	
38	S Z-1 北溝 Y 台部		(6.1)	7.8	5	密	良好	淡茶褐色	内面ナブ、指押さえ、外面板ナブ	
39	S Z-2 南溝 Y 壺	10.4	(11.0)		10	密	良好	黒褐色	内面板ナブ、外面ハケメ	外面縞線文
40	S Z-2 南溝 Y 壺		(23.9)		30	密	良好	黒褐色	内面ナブ、指押さえ、外面ハケメ、板ナブ	外面縞線文
41	S Z-2 南溝 Y 壺	12.8	(12.2)		40	密	良好	黒褐色	内面ナブ、指押さえ、外面ハケメ、ナブ	外面縞線文
42	S Z-2 南溝 Y 壺	16.8	(37.3)	7.0	70	密	良好	淡茶褐色	内面ハケメ、指押さえ、外面ハケメ、板ナブ	外面縞線文・刺突文
43	S Z-2 南溝 Y 壺	13.0	(4.7)		5	密	良好	暗黒褐色	内外面板ナブ	外面縞線文
44	S Z-2 南溝 Y 壺	14.2	(5.2)		5	密	良好	黒褐色	内外面板ナブ	外面縞線文
45	S Z-2 南溝 Y 壺	14.4	(6.9)		5	密	良好	淡黄褐色	内面ナブ、指押さえ、外面板ナブ	
46	S Z-2 南溝 Y 壺	13.6	(6.8)		5	密	良好	淡灰褐色	内外面板ナブ	
47	S Z-2 南溝 Y 壺				5	密	良好	淡茶褐色	内外面ナブ	
48	S Z-2 南溝 Y 壺				5	密	良好	淡褐色	内外面ナブ	外面縞線文・縞線文
49	S Z-2 南溝 Y 壺	30.2	(15.5)		20	密	良好	褐色	内面板ナブ、外面ミガキ、板ナブ	口唇刻目
50	S Z-2 南溝 Y 壺	16.2	(10.2)		20	密	良好	茶褐色	内面ハケメ、板ナブ、外面ミガキ、指押さえ	口唇刻目
51	S Z-2 南溝 Y 壺	27.4	(6.5)		10	密	良好	淡褐色	内面板ナブ、外面ナブ、指押さえ	口唇刻目
52	S Z-2 南溝 Y 壺	12.7	(3.0)		5	密	良好	淡灰色	内面板ナブ、ハケメ、外面板ナブ、指押さえ	口唇刻目
53	S Z-2 南溝 Y 台付壺	19.8	(5.9)		5	密	良好	淡茶褐色	内面板ナブ、指押さえ、外面ナブ	口唇刻目
54	S Z-2 南溝 Y 底部		(6.6)	6.6	5	密	良好	淡灰褐色	内面板ナブ、外面ナブ、指押さえ、底面未調整	
55	S Z-2 南溝 Y 底部		(2.0)	6.0	5	密	良好	淡黄褐色	内面板ナブ、外面ナブ、底面未調整	

遺物%	層・遺構 器種・分類	口径	器高	底径	残	胎土	施成	色調	調整	備考
56	SZ-2・南溝 Y 底部	(3.2)	4.7	5	密	良好	淡黄褐色	内外面板ナブ、底面板ナブ		
57	SZ-2・南溝 Y 底部	(4.0)	6.0	5	密	良好	暗灰色	内外面板ナブ、底面未調整		
58	SZ-2・南溝 Y 底部	(4.1)	4.8	5	密	良好	暗灰色	内面板ナブ、外面板ナブ、ミガキ、底面未調整		
59	SZ-2・南溝 Y 底部	(2.1)	5.2	5	密	良好	暗灰色	内面ナブ、外面板ナブ、指押さえ、底面段み底		
60	SZ-2・南溝 Y 底部	(1.4)	7.0	5	密	良好	暗灰褐色	内面ナブ、外面板ナブ、底面板ナブ		
61	SZ-2・南溝 Y 底部	(2.6)	7.4	5	密	良好	淡褐色	内面ナブ、外面ナブ、指押さえ、底面ナブ		
62	SZ-2・南溝 Y 底部	(2.8)	6.3	5	密	良好	淡赤褐色	内面ナブ、指押さえ、外面ナブ、底面ナブ		
63	SZ-2・南溝 Y 底部	(2.9)	8.0	5	密	良好	赤褐色	内面板ナブ、外面ナブ、底面未調整	煤付着	
64	SZ-2・南溝 Y 底部	(1.9)	7.3	5	密	良好	淡赤褐色	内外面ナブ、底面未調整		
65	SZ-2・南溝 Y 台部	(10.2)	11.8	10	密	良好	淡赤褐色	内面板ナブ、外面ナブ		
66	SZ-2・南溝 Y 台部	(8.2)	9.9	10	密	良好	淡赤褐色	内外面ナブ		
67	SZ-2・南溝 Y 台部	(7.7)	10.1	10	密	良好	赤褐色	内面板ナブ、外面ナブ		
68	SZ-2・南溝 Y 台部	(5.1)	6.3	5	密	良好	赤褐色	内面ナブ、指押さえ、外面ナブ		
69	SZ-2・南溝 Y 台部	(7.7)		5	密	良好	灰灰色	内外面ナブ		
70	SK-1 Y 壺	6.7	(10.3)	20	密	良好	暗灰色	内面ナブ、外面ナブ		外面磨擦文
71	SK-1 Y 壺	7.6	(17.3)	15	密	良好	暗黒褐色	内面ナブ、指押さえ、外面ナブ		外面磨擦文
72	SK-1 Y 壺	5.0	(9.9)	10	密	良好	淡黄褐色	内外面ナブ		
73	SK-1 Y 壺	8.8	(3.5)	5	密	良好	黒灰色	内面板ナブ、外面ナブ		
74	SK-1 Y 壺	(6.1)		5	密	良好	暗黒褐色	内面ナブ、指押さえ、外面ナブ		外面磨擦文
75	SK-1 Y 壺	12.8	(6.0)	5	密	良好	淡赤褐色	内外面ナブ、ハケメ		外面磨擦文
76	SK-1 Y 壺	14.0	(4.8)	5	密	良好	淡赤褐色	内面ナブ、ハケメ、指押さえ、外面ナブ		口唇刻目
77	SK-1 Y 壺	15.6	(4.9)	5	密	良好	黒灰色	内外面ナブ		
78	SK-1 Y 壺	15.6	(9.5)	10	密	良好	淡赤褐色	内面板ナブ、指押さえ、外面板ナブ		外面刻目
79	SK-1 Y 壺	14.0	(9.6)	5	密	良好	淡褐色	内面ナブ、指押さえ、外面ナブ、指押さえ		
80	SK-1 Y 壺	17.0	(7.8)	5	密	良好	淡黄褐色	内外面板ナブ		外面刻目
81	SK-1 Y 壺	18.2	(1.8)	5	密	良好	淡黄褐色	内面ナブ、外面ハケメ		口唇刻文
82	SK-1 Y 壺			5	密	良好	褐色	内外面ナブ		外面磨擦文
83	SK-1 Y 壺			5	密	良好	暗黒褐色	内外面ナブ		外面磨擦文
84	SK-1 Y 壺			5	密	良好	褐色	内外面ナブ		外面磨擦文
85	SK-1 Y 壺			5	密	良好	褐色	内外面ナブ		外面磨擦文
86	SK-1 Y 高坪			15	密	良好	茶褐色	内面ハケメ、外面ナブ、ハケメ		スカシ穴
87	SK-1 Y 鉢			5	密	良好	茶褐色	内外面ハケメ		
88	SK-1 Y 鉢	29.0	(10.1)	40	密	良好	淡赤褐色	内面板ナブ、外面ハケメ		
89	SK-1 Y 鉢	39.5	(15.3)	20	密	良好	淡赤褐色	内面板ナブ、ナブ、外面ナブ		内外面磨擦状文
90	SK-1 Y 壺	26.8	(7.0)	5	密	良好	褐色	内外面板ナブ		
91	SK-1 Y 壺	25.6	(6.3)	5	密	良好	淡赤褐色	内面板ナブ、外面ハケメ、板ナブ		口唇刻目
92	SK-1 Y 壺	24.2	(8.4)	5	密	良好	淡赤褐色	内面ナブ、ハケメ、外面ハケメ		
93	SK-1 Y 底部	(1.5)	5.2	5	密	良好	灰褐色	内外面ナブ、底面ナブ		
94	SK-1 Y 底部	(2.6)	6.3	5	密	良好	褐色	内面ナブ、指押さえ、外面ナブ、底面未調整		
95	SK-1 Y 底部	(2.9)	5.6	5	密	良好	淡赤褐色	内外面ナブ、指押さえ、底面ナブ		
96	SK-1 Y 底部	(3.3)	5.8	5	密	良好	褐色	内面ナブ、外面板ナブ、底面ナブ		
97	SK-1 Y 台部	(4.7)		5	密	良好	淡赤褐色	内面ナブ、外面板ナブ		
98	SK-1 Y 台部	(5.1)		5	密	良好	褐色	内面ナブ、外面板ナブ		
99	SK-1 Y 台部	(6.6)		5	密	良好	淡褐色	内面板ナブ、外面ミガキ		煤付着
100	SK-1 Y 台部	(4.7)		5	密	良好	淡赤褐色	内面板ナブ、外面板ナブ		
101	SK-1 Y 台部	(3.8)	11.6	5	密	良好	褐色	内面板ナブ、指押さえ、外面ナブ		
102	SK-1 Y 台部	(6.4)	10.6	5	密	良好	淡赤褐色	内面ナブ、指押さえ、外面ハケメ		
103	SK-1 Y 台部	(4.9)	8.8	5	密	良好	暗赤褐色	内外面ナブ		
104	SK-1 Y 台部	(4.0)	8.4	5	密	良好	茶褐色	内面板ナブ、外面ナブ		
105	SK-1 Y 台部	(5.2)	11.0	5	密	良好	淡赤褐色	内外面ナブ		煤付着
106	SK-1 Y 台部	(5.7)	8.2	5	密	良好	淡褐色	内面板ナブ、外面ナブ		
107	SK-1 Y 台部	(5.8)	7.6	5	密	良好	淡赤褐色	内面ナブ、指押さえ、外面ナブ、指押さえ		煤付着
108	SK-3 P 壺	(5.7)	12.2	5	密	良好	茶褐色	内面ナブ、外面ケズリ板ナブ、底面未調整		
109	SK-5 S P 坏身	(1.3)	9.0	5	密	良好	灰灰色	内外面回転ナブ、底部回転ヘラケズリ		
110	SK-6 R 塚み石	長さ13.8、幅11.8、厚さ4.7						石材砂削		

遺物%	層・遺構	器種・分類	口径	器高	底径	残	胎土	焼成色	調	調整	備考
111	SK-7	S 甕		3.2		5	密	良好	淡灰色	内外面回転ナブ、自然縁付着	
112	SK-7	P 碗		(1.8)	7.8	5	密	良好	淡灰色	内外面回転ナブ	
113	SK-7	H 皿				5	密	良好	淡褐色	内外面ナブ	
114	SK-8	H 皿	8.5	2.2		25	密	良好	褐色	内面ナブ、外面未調整、指押さえ、採付着	
115	SK-9	P 小皿	9.0	2.8	4.6	100	密	良好	淡灰色	内外面回転ナブ、底部未切り	
116	SK-9	P 小皿		(1.9)	4.7	50	密	良好	淡灰色	内外面回転ナブ、底部未切り	
117	SK-9	H 小皿	10.7	2.1		25	密	良好	淡白褐色	内面ナブ、外面未調整、指押さえ	
118	SK-10	P 小皿	8.6	1.8	5.3	30	密	良好	淡灰褐色	内外面回転ナブ、底部未切り	
119	SE-1	P 碗		(2.6)	7.0	30	密	良好	淡灰色	内外面回転ナブ、底部未切り、高台付散飯	
120	SE-1	P 碗		(2.6)	7.6	40	密	良好	淡灰色	内外面回転ナブ、糸切り	
121	SE-2	T 椀	11.5	7.3	5.2	55	密	良好	淡黄褐色	内面回転ナブ、外面回転ヘラケズリ、底部削り出し、反輪	
122	SE-1	T 椀鉢	33.0	(10.7)		10	密	良好	茶褐色	内面回転ナブ、クシ目、外面回転ナブ、敷輪	
123	SE-1	H 皿	8.6	1.9		40	密	良好	淡褐色	内外面ナブ、底部に穿孔あり	
124	SE-1	H 皿	10.6	2.1		30	密	良好	淡赤褐色	内面板ナブ、外面未調整、指押さえ	
125	SE-1	H 皿	19.6	(5.5)		5	密	良好	淡褐色	内面板ナブ、外面ナブ、指押さえ	
126	SD-1	P 碗		(2.5)	8.0	30	密	良好	淡灰色	内外面回転ナブ、底部未切り	
127	SD-1	P 甕				5	密	良好	灰褐色	内面ナブ、外面ナブ、叩き目	
128	SD-1	T 碗	11.4	4.6	4.6	30	密	良好	淡黄褐色	内外面回転ナブ、底部削り出し、反輪	
129	SD-1	T 碗		(5.0)	4.1	70	密	良好	淡黄褐色	内外面回転ナブ、底部削り出し、反輪	
130	SD-1	N 丸瓦	長さ6.6、幅6.1、厚さ1.9			5	密	良好	淡褐色	内面本目痕、外面ナブ	
131	SD-2	P 碗		(2.3)	8.2	40	密	良好	淡灰色	内外面回転ナブ、底部未切り	
132	SD-2	P 碗		(2.2)	7.2	10	密	良好	淡灰色	内外面回転ナブ、底部未切り	
133	SD-2	T 碗	10.2	6.7	4.7	85	密	良好	茶褐色	内外面回転ナブ、底部未切り	
134	SD-2	T 甕				5	密	良好	灰色	内面ナブ、指押さえ、外面回転ナブ	
135	SD-2	T 椀鉢	27.0	11.1	10.0	25	密	良好	淡褐色	内面回転ナブ、クシ目、外面回転ナブ、底部未切り	
136	SD-2	H 皿	26.0	(5.9)		10	密	良好	淡赤褐色	内面ナブ、外面ナブ、指押さえ	
137	SD-2	H 皿	14.0	(6.3)		10	密	良好	淡黄褐色	内外面ナブ	
138	SD-1-2	P 碗		(1.8)	6.6	5	密	良好	淡灰色	内外面回転ナブ、底部未切り	
139	SD-1-2	P 甕				5	密	良好	灰色	内面ナブ、外面叩き目	
140	SD-1-2	P 甕	24.0	(7.2)		5	密	良好	灰色	内面回転ナブ、指押さえ、外面回転ナブ	
141	SD-1-2	P 甕				5	密	良好	灰色	内外面回転ナブ	
142	SD-3	H 高坏		(7.2)		30	密	良好	淡褐色	内外面ナブ	
143	SD-3	P 碗		(2.7)	8.0	20	密	良好	淡灰色	内外面回転ナブ、糸切り	
144	SD-3	T 皿	10.8	(2.3)	5.0	20	密	良好	暗茶褐色	内外面回転ナブ、底部回転ヘラケズリ	
145	SD-3	H 皿	11.2	2.5		50	密	良好	淡褐色	内面板ナブ、外面未調整、指押さえ	
146	SD-3	H 皿	11.6	1.5		25	密	良好	淡褐色	内面ナブ、外面未調整、指押さえ	
147	SD-3	H 皿	7.6	1.4		85	密	良好	淡褐色	内面ナブ、外面未調整、指押さえ	
148	SD-3	H 皿	17.6	(5.7)		10	密	良好	淡赤褐色	内面板ナブ、指押さえ、外面ナブ、ハケメ、側面に穿孔あり	
149	SD-4-5	P 碗		(2.1)	8.2	10	密	良好	淡灰色	内外面回転ナブ、底部未切り、高台付散飯	
150	SD-4-5	P 碗		(2.1)	6.3	10	密	良好	灰色	内面回転ナブ	
151	SD-4-5	P 碗		(1.2)	7.0	10	密	良好	淡灰色	内外面回転ナブ、底部未切り	
152	SD-4-5	T 甕				5	密	良好	暗茶褐色	内外面回転ナブ	
153	SD-4-5	T 皿	13.9	1.8		5	密	良好	淡褐色	内面ナブ、外面ナブ、指押さえ	
154	SD-4-5	T 蓋	5.2	1.9		70	密	良好	淡灰色	内外面回転ナブ、敷輪	
155	SD-4-5	H 皿	13.9	1.8		5	密	良好	淡褐色	内面ナブ、外面未調整、指押さえ	
156	SD-6	D 土製文脚	長さ16.6、幅(7.5)、厚さ6.2			30	密	良好	褐色	外面ナブ、シボリ	
157	表土	Y 甕				5	密	良好	淡褐色	内面ナブ、外面糸痕	
158	表土	(H) 皿	10.6	2.0		60	密	良好	淡赤褐色	内面ナブ、外面未調整、指押さえ	

※表土の数は15a、( )は残存数値。底径には脚部径・高台径を含む。残：残存率(%)を示す。

Y-赤生土器、H-土師器、S-灰土器、P-中世陶器、T-施釉陶器(古瀬戸以降)、Z-磁器、D-土製品、R-石製品、N-瓦製品

## 第5章 まとめ

前回までの調査で、橋良遺跡は弥生時代中期と中世を中心とした遺跡であるものと考えられていた。しかし、今回の調査で古墳時代前期や近世にも集落が存続していたことが判明した。ここでは、検出された遺構や遺物を検討し、遺跡の性格を簡単にまとめる。

検出された遺構には、竪穴住居、掘立柱建物、方形周溝墓、溝、井戸、土壇等がある。竪穴住居のSB-1は、壁溝をもつ隅丸方形若しくは隅丸長方形をなすものと思われ、住居内SK-4から出土した土師器の壺、高坏、台付甕（S字甕C類）より古墳時代前期（4世紀前半）の元屋敷式中段階、廻間Ⅲ式の新しい段階に比定される。当遺跡において、新たに古墳時代にも集落が営まれていたことを示す好例である。また、この土壇からは山陰系の壺（第11図5）や畿内系の高坏（第11図6）がしており、当時の交流が推測され興味深い。

掘立柱建物はSB-2～11の10棟が重複して検出されている。柱穴からの遺物はSB-2～6・9～11で出ているが細片のため正確な時期は特定できず、中～近世の範囲で捉えられるものばかりである。これ以外の掘立柱建物からは出土遺物はみられず帰属時期については不明である。ただ、大半の掘立柱建物はSD-3～5と主軸がほぼ同じであるため、溝の廃絶時期の17世紀前半～19世紀中葉を中心とした時期のものと考えたい。しかも、掘立柱建物は3箇所集中していることから、中～近世に長期的に継続して屋敷が建っていたものと考えられる。

方形周溝墓は2基が検出されている。SZ-1は北溝のみの検出であるが、第1次調査のSZ-2と同様な形態をしている。出土遺物より弥生時代中期後葉の下長山式期のものと思われる。SZ-2は南溝と西溝の一部が検出されたのみであるが、SZ-1の溝と形態が類似しており方形周溝墓と判断した。時期は中期後葉の下長山式期であり、若干時期が新しい。ただ、溝の位置関係がずれていることから形が歪んだタイプか、若しくは性格の異なる遺構の可能性も考えられる。

井戸は1基確認されており、内部から貝層が確認されている。出土遺物は中世陶器・碗から近世陶器・碗が出ており、17世紀前半に廃絶したことが考えられる。

溝もSD-1～6の6条が確認されている。これらの溝は屋敷の区画溝と考えられ、特にSD-3～5は建物との主軸と合致している。中～近世に集落が密集していたことを示すものであろう。

土壇のうちSK-1は、大型の卵形土壇で壁面がオーバーハングする特異な形態をしている。内部からは弥生時代中期後葉の土器が多量に出ており、廃棄土壇の可能性が考えられる。

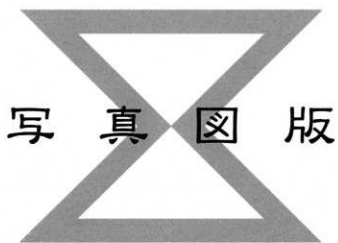
出土遺物では、前述したSK-4から古墳時代中期の土器が一括して出ており、良好な資料といえる。方形周溝墓やSK-1からは多量の弥生土器が出ているが、現在の様子から見ると混在している可能性がある。SK-6からは時期不明だが窪み石が出ている。また、SD-1からは古代の布目瓦が出ており、周辺に所在する橋良東郷古窯のものが運ばれてきた可能性がある。

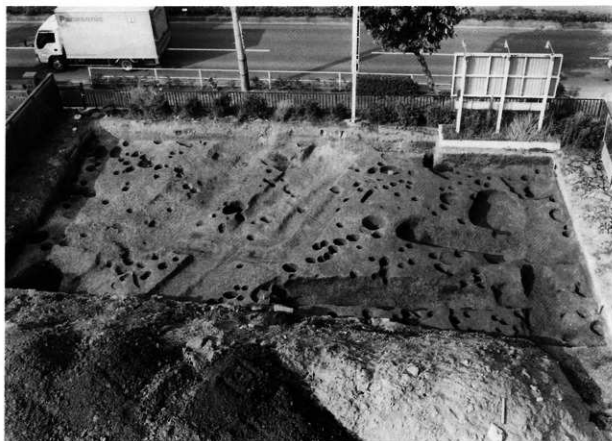
以上、今回の調査では弥生時代中期の墓域が東へ広がることや、古墳時代中期にも集落が営まれていたことがわかった。ただ、その間を埋める弥生時代後期の住居が確認されておらず、今後は居住地点がずれるのか、集落が廃絶していたのかを確かめる必要があろう。



## 報告書抄録

ふりがな		はしらいせき(2)						
書名		橋良遺跡(II)						
副書名								
巻次								
シリーズ名		豊橋市埋蔵文化財調査報告書						
シリーズ番号		第51集						
編著者名		岩瀬彰利						
編集機関		豊橋市教育委員会・豊橋遺跡調査会						
所在地		〒440-8501 豊橋市今橋町1番地 TEL 0532-51-2879						
発行年		西暦1999年3月25日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
はしらいせき 橋良遺跡	とよはしはしらいせき 豊橋市柱三番 ばんらう 町14-1・2他	23201	79469	34° 44' 45"	137° 22' 45"	19980817~ 19980911	150㎡	事務所新 築工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
橋良遺跡	集落跡 墓域	弥生 古代 中世 近世	竪穴住居、方形周 溝墓、土壇	弥生土器 須恵器 中世陶器 陶器、土師器				





1. 調査区全景 (南から)



2. SB-1 全景 (南から)

写真図版 2



1. SB-2~5全景 (南東から)



2. SB-6~8全景 (南から)



1. SB-9~11 全景 (南から)



1. SZ-1 北溝全景 (南から)

写真図版 4



1. S Z-2 南溝・西溝全景 (南から)



2. SK-1 全景 (南から)



1. SE-1 (東から)



4. SK-2 (南から)



2. SB-5・P4 (東から)



3. SK-3 (北から)

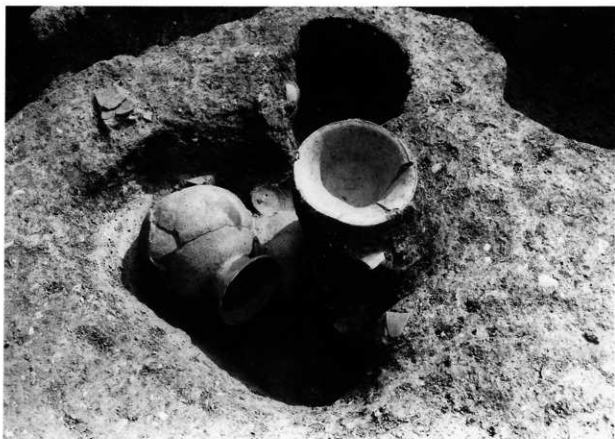


5. SD-1 内具層分布状況 (西から)

写真図版 6

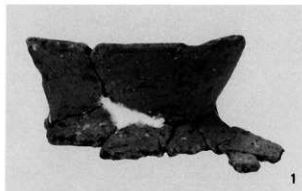


1. SB-1・SK-4内遺物出土状況（南から）

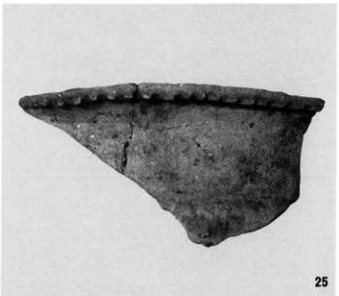


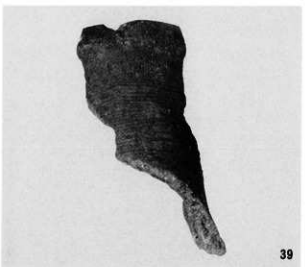
2. SK-4内遺物出土状況（北から）



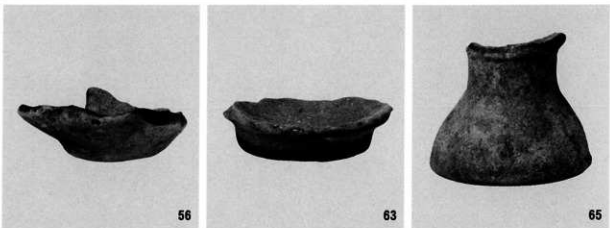
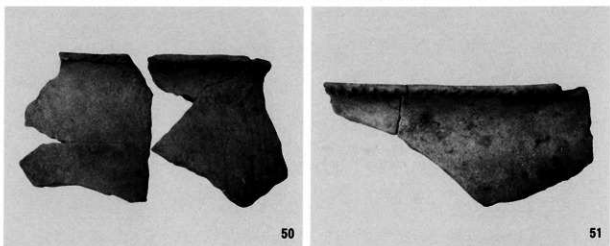
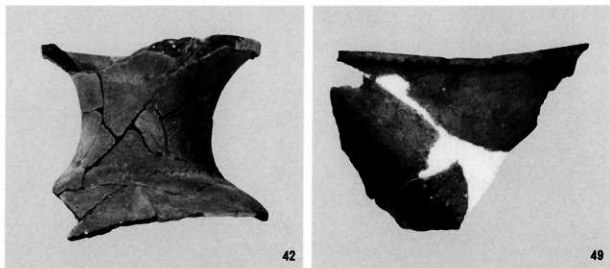


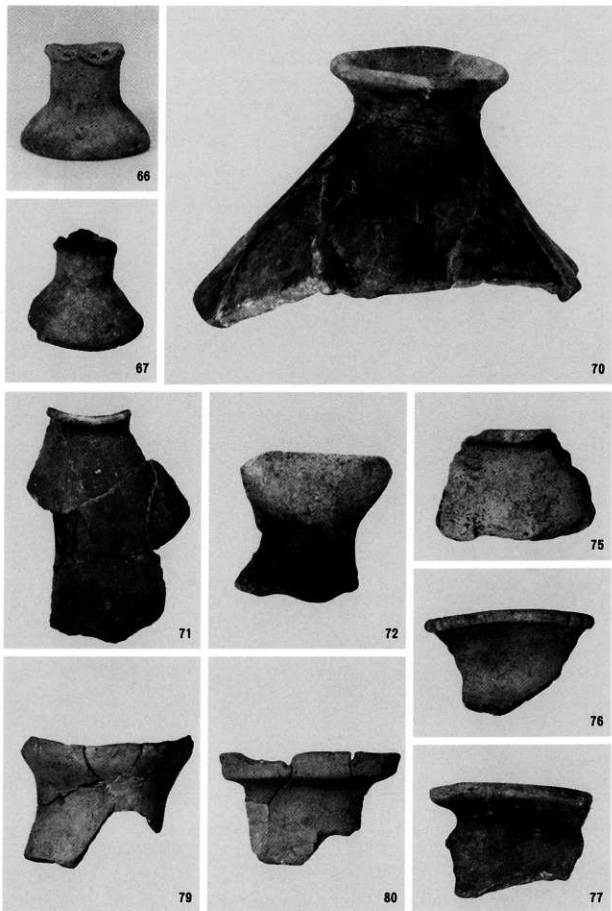
写真図版 8





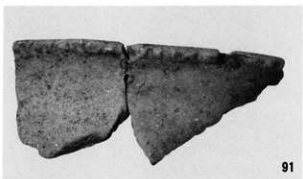
写真図版 10

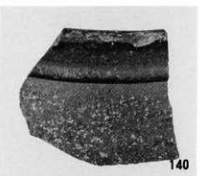
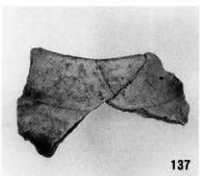
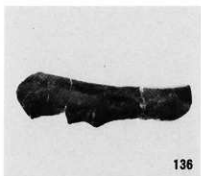
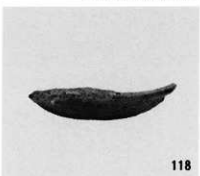
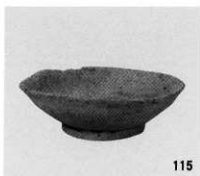




出土遺物-5

写真図版 12





豊橋市埋蔵文化財調査報告書第51集

橋良遺跡（Ⅱ）

平成11年3月25日

発行 豊橋市教育委員会 ©

文化振興課

豊橋遺跡調査会

〒440-8501 豊橋市今橋町1

印刷 共和印刷株式会社